

豫想するのである。かくして陽明は知と行とは、畢竟表裏を爲すものと考へたのである。故に曰はく「知の真切篤實の處便ち是れ行。行の明覺精察の處便ち是れ知。若し知る時其心真切篤實なる能はざれば、則ち其の知も明覺精察なる能はず」と、真切篤實は行を形容し、明覺精察は知を形容した語である。而して今知の真切篤實なる方面を行、行の明覺精察なる方面を知といふ。即ち知と行とは別物なれども、其の間に必然的共通的連絡あること、恰も一物に兩方面あるが如しといふ意である。而して此の知行合一論の基礎は、即ち心即理である。曰はく「心を外にして理を求む。此れ知行の二なる所以なり。理を吾心に求む。此れ聖門知行合一の教」と。

太極圖及び太極圖説とは何ぞや

太極圖及び太極圖説は共に周茂叔の作ったもので、宋儒理學の根源であり、支那哲學史上最も重要な位置を占めるものである。此の圖は周子の創造でなくて、陳

搏から出て居るものであることは、毛奇齡の太極圖説遺議に詳かである。太極圖説は此の太極圖の説明であつて、周子の宇宙論及び人性論である。即ち左の如くである。

太極圖説

無極而太極。太極動而生陽。動極而靜。靜而生陰。靜復動。一動一靜。互爲其根。分陰分陽。兩儀立焉。陽變陰合。而生水火木金土。五氣順布四時行焉。五行一陰陽也。陰陽一太極也。太極本無極也。五行之生也。各一其性。無極之真二五之精。妙合而凝。乾道成男。坤道成女。二氣交感。化生萬物。萬物生而變化無窮焉。惟人也得其秀而最靈。形既生矣。神發知矣。五性感動而善惡分。萬事出矣。聖人定之以中正仁義。而主靜。立人極焉。故聖人與天地合其德。日月合其明。四時合其序。鬼神合其吉凶。君子脩之吉。小人悖之凶。故曰立天之道。曰陰與陽。立地之道。曰柔與剛。立人之道。曰仁與義。又曰原始反終故。知死生之說。大哉易也。斯其至矣。

周子の一のものを假定して萬物の源とした。此のものたる無差別にして名狀すべからざるものである。故に假に形容して無極而太極と曰ふた。(太極とは何ぞや參照)此太極は動と靜との二性を有し、之によつて陰陽の兩儀が生じ、陰陽合して水火木金土の五行の氣が生じ、而して四時行はるゝに至る。五行は其の性に於て相一致して居るが、此の五行の氣が合して男女の二原理を生ずる。此の二原理は周子の語によれば無極の眞、二五の精の妙合して凝つたものであるとするが、其意味は精密に知ることが出来ない。而して此の男女の二氣によつて萬物が生じて變化窮りがない。其の中五行の氣の純粹秀美なる所を得たものが人であり、形既に生じた時知覺の力があり、且つ五行の性を備へて居る。此の五性が感動して善惡分れ、人世の萬事が出来る。聖人の道は中正仁義に在る。而して靜を以て根本として居る。靜なれば五性感動して正しきを得。天然の秀美の性を全うする。これが即ち人極である。故に聖人は天地に參するのである。乃ち易の句を引いて「立天之道。曰陰與陽。立地之道。曰柔與剛。立人

之道。曰仁與義」(說卦)と云うて仁義の人道は、天地の道と並んで共に自然的なることを述べ、又同じく易の句を引いて「原始反終。故知死生之說」(繫辭)と云うて宇宙の眞理に冥合するものは、自己の去來歸趨を知るものとした。之を要するに太極圖説は、天理の根源を明かにし、萬物の終始する所を究めんとするものである。而して其の思想の系統を尋ねるに、天地は無より生ずると主張する道家の説と、天地の生々は二氣五行の運行によることを主張する儒家の説とを調和せんとしたもので、即ち儒家の易哲學の思想を基本とし、其の思想を表明せん爲めに、道家の無極圖を參酌したものである。

### 太極とは何ぞや

周子の太極は決して今日の哲學者の所謂時間空間を超越した絶對ではない。乃ち太極が一個の元氣なることは疑ふことが出来ない。若し之を以て元氣でないとしたなら

ば如何にして、これから陰陽の二元氣が生ずるかを説明することが出来ないであらう。殊に陰陽は一氣と云へるを見れば、太極も亦一元氣としなければならぬ。既に一元氣となれば、形而下の氣とせなければならぬ。然るに周子は之を以て純然たる形而下のものと爲すを避けた様である。是に於てか彼れは太極の上に無極の二字を加へ、以て太極の單に形而下のものではなくして、深遠なるものであることを示さうとした爲に彼れの思想を不明ならしめ、無極而太極の一句は後世疑問の中心となるに至つた。朱子と陸子との之に關する論戰は最も激しいものである。宋の學者は一般に太極を解して理とした。理は即ち形而上のもので、周子の太極を解するものとせば、恐らくは誤りである。朱子は理氣二元論であつて、周子の太極圖説を解して太極が陰陽を生ずるは即ち理が氣を生ずるものであるとしたけれども、二元論より見れば理が氣を生ずる理由なく、又氣が理を生ずる理由もなく、初めより兩者並立すべきものである。然るに朱子は周子を解して矛盾に陥つたのである。これ本來形而下たるべき太極を解して

形而上の理とした爲であつて、周子が無極と言つて太極の觀念を曖昧にした爲に、後に此の如き説を生ぜしむるに至つたのである。

## 無の説を問ふ

老子教は、古來の格言を蒐めて大成したものである。故に其の大體の傾向は、處世に在つて一身を全ふすると云ふのが、老子の根本主義なのである。彼の『夫惟不爭。故無尤』(八)とか、『功成名遂。身退天之道也』(九)とか『沒身不殆』とか云ふ説は、何れも其の身を顯れざる位地に置いて、以て其身の終りを全ふせんとするのである。老子の教は、佛教の様に解説を以て目的とせず、所謂功利主義の一種である。老子は其の根本主義に依つて、以て最大目的を達す可しとなして居る。故に『樸雖小。天下不敢臣。侯王若能守。萬物將自賓』(三二)と云ひ、又『故常無慾。可名於小矣。物歸焉。而不知主。可名於大矣。』(三四)と云ひ、更に又『功成事遂。百姓皆謂我自然。』(一七)と云つて居

るが、凡そ此等の文句は皆老子が力を勞すること少くして、功を收むることの多からん事を希望するの意であること、以て觀るべきである。孔子が人倫道德に従ひ、人事を盡して以て天命を待たんとするの思想とは、大いに相異なるのである。一言以て云ふならば、老子はその根本主義を以て最後の勝利を博せむとするのである。然らば老子の根本主義は何であらう。曰はく、無なるが如く靜なるが如き情調是である。情調は即ち心持ちである。客觀的に説くならば所謂風に相當す。人の心を形容して『明鏡止水』と云ふことがあるが、則ち是れである。斯の如き情調を以て根本主義となし、此情調に協ふ様な行をなさんとするのである。彼の『虛無恬淡』なる語は最も能く之を表現して居る。老子は活動せないのである。唯だ其の活動の虛なるが如く、無なるが如く、靜なるが如くならむことを要するのである。老子が孔子に對ひ、『良賈は深く藏して空しきが如く、君子は盛徳ありて容貌愚なるが如し』と言つたのも或は又『大を計るは其細に於てし難を計るは其の易に於てす』といったのも、つまり此の意に外なる。

らぬ。斯くて老子は易とか細とかいつて居るやうに、力を勞することの少きを欲したのである。力を勞することの少いのは無ではないが尙ほ無なるが如く、靜なるが如く、虛なるが如くだ。是れに依りて以て老子の根本主義が那邊に存するかを見るべきである。

然るに此種の情調は最もよく「無」なる文字に依りて表される。故に老子は此文字に依りて、根本主義を表した。老子を解する者の多くは、老子の無を以て虛無となし、又哲學上の實在となし、虛無なる實在より萬物の生成を説明しやうとするのである。實に老子の書を見る時は『有物混成、先天地生』といひ、一個の物即ち實在を假定し居るやうである。其外『天一』を得て以て清く地一を得て以て安し』といつて一個の實在が天地を貫通し居るが如くに言ふ。又米國のケラーズの如く老子の道を以て希臘哲學の Λογος (Logos) の如しとなす者もある。然れども吾人の見る所では何れも老子の眞を得たものでない。老子の主とする所は處世に在る。即ち實踐哲學に存在するので、其

の宇宙論の如きは、實踐哲學を應用して以て宇宙も亦無なりと觀察し、以て無に重大の意味を附與せんとするのである。老子は其の根本主義を無なる文字にて表はしたけれ共又一、玄、道、樸、谷神、天地の根等種々の名稱を用ひた。何れも同一體の謂である。一つの實在があるでなく、單に自己の實踐すべき指針たる情調を指したものに過ぎないのである。

## 浩然の氣の正解を問ふ

『孟子』曰はく「我れ善く吾が浩然の氣を養ふ。」「其の氣たるや至大至剛直きを以て養うて害なければ則ち天地の間に塞がる」「其の氣たるや義と道とに配して餒ゆるなきなり。是れ集義の生ずる所、義襲ふて之を取るにあらざるなり。行ふて心に慊からざるあれば則ち餒う(卷二)由是觀之、浩然の氣は集義則ち積義より發するもの、行ふて良心に恥づるものあれば則ち消沈す。今日の言葉にて云へば俯仰天地に愧ぢない底の

一種の情調に外ならない。文天祥の『正氣歌』に「天地有正氣。雜然賦流形」とあるのは正氣を以て一種廣大なものとして譬へたのみである。孟子の至大至剛天地の間に塞がると言つたのと其の意は同じだ。情調から解釋しないものは誤りだ。之れが空氣だの何んのと云ふは冗談である。哲學上の氣などいふ意味は全くない。單に氣持といふべきだが此字があるために大に人のためになつた。

## 虚無恬淡主義とは何んの學流か

虚無恬淡は利慾を離れ物事に淡泊なるが如き精神状態の形容辭であつて、老子の根本義に適用せられる。太史公曰く、李耳(老子)無爲自ら化し清静自ら正しと、語は異なつて居るが意味は同じ。

## 東洋學派問答

## 九流百家とは何を指すや

儒家者流・道家者流・陰陽家者流・法家者流・名家者流・墨家者流・縱橫家者流・雜家者流・農家者流・之れを九流と稱する。漢書藝文志には尙ほこの外に小説家者流を擧げて居る。また詭辨家・楊家等も注意すべき所である。百家とは諸子百家などいふて數多の學者を指すものである。諸子といふ時は賢人である。經傳といふ時、經は聖人に屬し、傳は賢人に屬する。論語も諸子の中だが、孔子は聖人だから特に之を諸子の中に入れてない。百の字九の字は大數を擧げたものである。

## 儒教とは何を指すか

儒教若くは儒學といふのは、孔子の教學を指したものである。孟子曰はく、孔子は集めて大成すと。子思曰はく、仲尼、堯舜を祖述し、文武を憲章すと。即ち孔子の道は畢竟堯舜文武の道である。孔子曰はく述べて作らず、信じて古を好む。竊に我を老彭に比すと。即ち孔子自身は何等作爲する所あるのではない。孟子曰く善く言て楊墨を距ぐ者は聖人の徒なりと。而して孔子の徒を以て自任し、常に孔子を唱法した。「孝經」に云はく先王の法言にあらざれば敢て言はず、先王の法行にあらざれば敢て行はず、先王の法服にあらざれば敢て服せずと。されば孔子は集大成と稱せらるれども孔子自身の動機より言へば、是が即ち先王の道であつて、自己の作つたものではない。茲に於て後世儒教と言へば、孔子の教學を指すと同時に、孔子の常に唱法せる先王聖人の教訓其者をも包含するのである。されば儒教又は儒學といふも判然とした一系統ではない。又如何なる人が儒者の中に包含せられるか、人々によつて多少見解を異にする。従つて後世孔孟を並稱し、儒教の二大典據とし、更に後世儒教を解釋した

一種の新哲學まで之を儒教と稱するに至つた。

### 儒教は何時起りしものか

儒教の目的は先王聖人の目的で、要するに治國平天下に在る。されど國家社會を治めることゝて君主が道德を守らねばならぬ。制度法律は單に之を助くる方便に外ならない。抑も古代の社會狀態を觀察するに數多の國があつた。即ち氏といふものは是れである。共工氏・軒轅氏・神農氏・歷陸氏等其の數は多い。通雅に氏は一國の號であるとあるのは、必ずしも國と稱することは出来ないけれども、兎に角氏は一つの獨立した團體であつて、此の如き團體は其の數多く各長を戴いて居た。而して長が人民を治める状態は恰も牧者が羊を養ふに似て居るより、之れを稱して牧といふ。群は互に相軋し、或は結合しつゝあつたものである。彼等の間には我が國に於ける君臣の如き差別はなく、大概同様であつた。其の間に於て覇者となるは餘程骨が折れるから實踐的

思想は起らざるを得ない。今堯舜以前は孔子の言はない所として、之れを別とするも堯舜以後に於て如何に實踐的思想が發達したか、堯舜は徳を以つて王となつた。詰り實踐的の力である。此くして天下を治めるは君主の道德を以て主とすといふのが古代政治の要領であつた。天子の徳は風、小人の徳は艸、艸之に風を加ふれば偃すといふ。如く人民は農を業とし、簡單なる生活をなして居たから、天子の風は自然に人民に行はれるに至り、道德と政治とが一致した者である。去れど人口は次第に増加し、交通の盛んなるに及んでは、到底法律を以つて之を治めなければならぬ。堯舜の頃にすら制度法律の設があつた。

以後歷朝の聖君、徳を中心として天下を治めんとせられた種々苦心經營の跡が、其儘儒教となつたのであつて、之を外にして儒教はないのである。故に儒教といふものは其の淵源に於ては、漠然としたものである。組織もなく秩序もない。孔子に至つては一の仁の字を立て、以て學者研究の中心とした。孔子の學者的なる所以は此に在る。

先王聖人と大に異なる所である。故に詳かに言へば、孔子以前の儒教と孔子の儒教と大に同からずであるが、大きく言へば孔子の道も治國平天下を目的とするもの、只だ學者的に一個の仁の字を出して、道德實行の方便とした迄である。

### 道家の意味如何

道家は支那哲學中の老莊派をいふ。之を道家といふのは、老子の道德經に因るのである。即ち其書中に道を以て一個の根本原理となし、之を中心として居るからである。又太史公『史記』自序に曰はく『道家は人の精神をして專一ならしめ、動は無形に合して萬物を贍足す。其術たるや陰陽の大順に因りて儒墨の善を采り明（明字漢書に據りて當に名に作るべし）法の要を撮り時と遷移し物に應じて變化す。俗を立て事を施して宜からざる所なし。旨約にして操り易く事少にして功多しと』藝文志に曰く『道家者流は蓋し史官より出づ、成敗存亡禍福古今の道を歴記し、然る後に要を秉り本を執り

清虚にして以て自ら守り、卑弱にして以て自ら持するを知る。此人に君たる南面の術なり。堯の克讓易の謙々一謙して四益なるに合ふ。此れ其長する所なり。放者之をなすに及びては則ち禮樂を絶去し、仁義を兼棄せんと欲して曰く獨り清虚に任じて以て治をなすべし』と、孔子も道を説くけれども、老子派の様に道の字に特別の意味を有たせない。故に道家とは言はない。道家の學説は即ち老子を中心とすべき者で、莊子、列子など其中の重なるものである。關尹子文子など其書は今にあるけれども疑はしい。道教は道家より出たものである。即ち老子の教を中心として出來た宗教で、今日では判然一大宗教となつて居る。其寺を觀といふ。僧侶も居る。何日頃から此宗教が出來たかは不明である。恐らくは唐以前であらう。神仙説など、混合して出來たものである。

### 神道の意義其の宗教との別如何

神道は周易にある文字であつて、日本に之を用ひたのは日本書記に始まる。孝徳天皇



の條に天皇「尊佛法、輕神道」の語がある。詰り日本固有の道を指したのであつて、其時特別に神道といふ者があつたのでなく、唯單に日本の神を祭る儀式慣習を指した者である。佛教儒教などの名稱があつて、又其慣習があるから神道といふ名を立てたのである。其後神道の名の下に佛教を混合し來りて、種々の別を生じた。從來生じた神道には純神道。山王一實神道。兩部習合神道。復古神道。三教調和神道。唯一神道。社家神道。垂加神道。宗教神道等がある。其中純神道といふは、即ち吾國固有の祭神の道といふ。神道は宗教でないから開祖はない。特別な經典もない。一切の神々の行動が其儘經典である。天御中主神、高皇產靈神、神皇產靈神の活動の如き重要な教訓である。託册二尊が天神の勅を受けて、此の國土を修理固成せられたるが如き亦神事である。天照太神皇孫を大八洲に降し給はんとし「葦原千五百秋之瑞穗國、是吾子孫可王之也。爾皇孫宜就而治焉、行矣、寶祚之隆、當天壤無窮矣」といはれ、神鏡、神璽、神劍を授けられた。國家の基礎教育の淵源皆此に生じた。神道を尊ぶものは此詔勅を重じなければならぬ。

此の如きの教義を指して神道といふ。日本古代の神の實行が其儘神道であることは恰度儒教に創設者がなく、唯古代の聖君賢相の天下を治むる所の言行が其儘儒教と言はるゝが如きである。

### 宗教としての神道如何

神道と云はゞ直に神社なりと思はるべきも、神道と神社とは元來同一のものでない。神社は單に日本の神を祭るのみの場所で、神道は神を祭り其恩恵を被らんとするものである。内務省に神社局があり、文部省に宗教局がある。神社局は神社の事を掌り、宗教局は凡て宗教の事を掌る。神道に十三派ある。宗教局の取扱ふ所である。神道、黒住教、修成派、大社教、扶桑教、大成教、實行教、神習教、御嶽教、禊教、神理教、金光教、天理教である。神道には説教場がある、名づけて祠宇と謂ふ。恰も耶蘇教の會堂に相

ひ當るものである。説教する人即ち耶蘇教の牧師に該當する者を名づけて、教導職又は教師といふ。即ち葬式に與る者で、白衣を着けて供する者が是である。通常人は白衣を着けたる者を見て、直に以て神主と爲すならんも、神主と教導職とは一つでない。神主は神社に罷り出で、神を祭る者、教導職は宗教の職務を掌る者である。神主にも亦種々なる階級がある。神社にも官幣社、國幣社、府縣鄉村社、攝社、末社等の別がある。又別格官幣社がある。官幣社及び國幣社には左の神職がある。

宮司 一人 權宮司 一人 禰宜 一人 主典 社掌  
府縣社及び郷社には

宮司 一人 社掌 若干人

是等全體を總稱して神職といふ。神職は勅任官以下、奏任官、判任官等に相ひ當るもので、其取扱を受けるものなれば、則ち官吏の一部分である。今その規則を示せば下の如し。

宮司及權宮司ハ奏任待遇トシ内務大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命シ禰宜主典及社掌ハ判任待遇トシ地方長官之ヲ命ス

神宜司應は伊勢大神宮の事を司るものにして左の職員がある。

祭主 一人 大宮司 一人 少宮司 一人 禰宜 十人 權禰宜 二十人 社掌 四十人

祭主は親任とし皇族を以て之に任じ、大宮司は勅任又は奏任とす。

然るに神道には管長あり、管長は勅任待遇なれども、全く宗派の長で神社とは何等の關係なき者である。而て祭つて居るのは其宗の神様である。恰度佛教で彌陀を拜んで居る様な者だ。故に假令ひ神道の方に神社があるにしても、其宗内の神社である。神社とは神を祭れる特別の場處を指し、政府より見て神社となすときは、其處に神職を置く。是れ一に政府の認定を持つて初めて定まるものである。神道十三派に在りては神を祭るも、神社に於て祭るとは大に其意味を異にして居る。されば神社と神道と

の差は甚だ少きが如くなれども、兎に角日本の政府の取扱に於て兩者全く區別されて居るのである。

### 陸王學とは何んぞや

陸象山と王陽明とを併せて陸王と云ふ。王陽明は象山の學統を繼承した。故に併せて陸王學派といふ。陸象山は心即理を以つて斷案とし、自己の田地を開拓するを以つて目的とした。王陽明は心即理を藉り來りて致良知、知行合一等の術語を作つた。同じく直截簡易の學である。然れども陽明の方が深奥だ。彼れ自身言ふた如く陸象山の學は粗笨である。致知格物の説の如きも陽明に在ては極めて詳かである。陽明學の名もあるが、又或は陸王學と云ふ名もある。朱子學と言ひ、程學と言ひ、又程朱學と言ふ。程明道は陸王學の祖と見るべきであるけれども、朱子も明道を尊ぶため明道のみは何れにも属せしむべきである。唯だ程王の學とは云はない。

### 墨家とは何んぞや

先秦時代に出た墨翟の一派をさすのである。漢書藝文志に曰はく「墨家者流。蓋出於清廟之守」として居る。清廟とは周の祖先である。姜嫄を祀つた廟であつて、その構造儀式は質素を旨とする<sup>旨とする</sup>と稱せられて居る。「列子」楊朱篇及び莊子天下篇には墨子は禹を祖とする<sup>とする</sup>とある。然れども想像の説に過ぎない。又「呂覽」の當染は周の使であつて魯に住する史角に起因したとして居る。而して「淮南子」には「墨子學儒者業」受孔子之術以爲其禮煩擾而不悅（要略訓）とある。即ち儒から出たとして居る。然れども之れは單に淵源を研究したいといふ丈のことであつて、其實墨子の説は古代の拜天宗靈魂論などから來たもので、一面に於ては當時の王侯の自ら驕奢に流れて民の疾苦を省みざるに反抗した者である。墨子の派として漢書には「尹佚」二篇、「田俅子」三篇、「我子」一篇、「隨巢子」六篇、「胡非子」三篇、「墨子」七十一篇、六家八十一篇とある。

## 程朱學派とは何んぞや

朱子の學は程明道及程伊川から出て居る。故に程朱學と稱せらる。朱子は『近思錄』に由つて知り得べきが如く、周・二程・張の四子を尊信すること甚だしいが、其の學は最も程子に近い。程朱學派に對する學派中最大な者を陸王學派とする。去れど明道と伊川とは説が異なるから程朱派といふときは、主として伊川を指す。即ち萬物は理氣二元から成るといふ説で、理は即ち善であつて同じだ。之れを本然の性とする。然るに人體の同じくないがため、氣質の性は人々同じくない。氣質の性には善なるものあり、又不善なるものある。聖人は兩者共に善な者。衆人は本然の性は勿論あるけれども、氣質の性は善でない。之れを矯めてそして本然の性をして、其の光彩を發揮せしめなければならぬ。又程朱學派は一般に格物窮理を重んじ、讀書の必要を認めた。一般に言へば心を正うし意を誠にし、天理を體認しようとするに外ならない。

## 宋學とは何を指すか

宋學とは支那宋代に起つた儒教を曰ふ。宋代には儒教のみならず、他の學問も盛んになつたが、宋學といへば其時代以後の儒教を指す。此れは特別なる一種の哲學であるからである。周濂溪、張橫渠、程明道、程伊川、朱子、陸子などは皆有名なるものだ。朱子の後二百五十二年にして王陽明起り、陸學を承けて朱子に反對したけれども矢張り宋學である。

宋學には種々の別があるけれども、概して言へば理とか性とかを論ずるものである。故に性理學などと云ふ。『性理大全』といふ書物がある。宋代に發生した哲學上の學説を集めたものである。又宋の學者は道の字を連發する。孔子孟子とても道を説いたのであるが、宋の學者の様に始終道の字許りを言はない。故に日本の物徂徠などは冷笑の意味を帯びて道學先生などといふ。又宋學者自身に道學といふこともある。道學

と道教とは別だ。道教は老子の教だ。

### 餘姚の學とは何んぞや

餘姚は陽明の郷里である。故に陽明學のことを稱して餘姚の學といふ。其説は別項王陽明を見るべきである。

### 濂洛關閩の學とは何か

是れも地名で名付けたものだ。濂は周濂派の居つた濂溪からいふたものである。洛は程子の居つた所、關は即ち張橫渠が關中の人であるからいふたのである。閩は即ち朱子の生れた地である。

### 其他諸派の名稱を簡單に示せ

- 一、詭辨派 支那先秦時代に在りて惠施、公孫龍の徒、詭辨を弄したる者、卵に毛あり（卵は發育する故）。鉤に鬚あり（魚に鬚ある故）。鶏三足（二本の足の外に行かんとする意志）。丁子に尾あり。（丁子は蝦蛙のこと、丁の字に尾ある故に云ふ）孤犢未だ嘗て母あらず。（孤犢は母なき故にいふ）髮千金を引く（切るゝはムラあるため）凡そ此種のことをいふ。所謂附會の説もあるし、又多少の理のあるものもある。
- 二、從橫家 合從連衡をこととするものをいふたのである。合從は山東の諸侯を合して秦に當らんとするもので蘇秦の説である。連衡とは山東の諸侯をして西の方秦に仕へしめんとするものである。從は「たて」といふことで横は「よこ」即ち衡である。
- 三、刑名家 名に由て實を責めんとするもので、孔子が名を正さんかといふたのも此思想である。尹文子は其の代表者だ。
- 四、折衷派 折衷派とは種々の學説を折衷せんとするもので、支那の古代に在つては

孔老を折衷せんとしたものに鶻冠子がある。

### 異學の禁とは何んぞや

日本徳川家齊將軍の時柴野栗山の案を容れて、老中松平定信の英斷を下したるものである。其要は朱子學以外の諸流を學ぶものをして、政府に登庸せざらしむるのである。勿論幕府の學校に入ることを許さない。寛政二年五月のことで幕府は左の禁令を林大學頭信教に達せしめた。

朱學の儀は慶長以來御代々御信用の事にて己に其方代々各學風維持の事彼仰付置候得ば無油斷正學相勵門人共取立可申筈に候。然處近頃種々新規の説をなし異學流行風俗を破候類有之全く正學衰微の故に候哉。甚不相濟事に候。其方門入共の内にも右體學術純正なるもの折節有之様相聞、如何に候。此度聖堂取締嚴重被仰付柴野彦助岡田清助儀右御用被仰付候事に候得ば能々此者申談、急度の門人

共異學相禁猶又不限自門他門、申合正學論究致、人材取立候様相心掛可申候。

即ち朱子學は、幕府の正學として夙に認められて居つた。朱子學を以て謹厚嚴正なる學風としたのである。此外に當時にあつた所の學問は徂徠學仁齋學など何れも朱子學と反對である。陽明學は中江藤樹に由つて傳へられた。山崎闇齋の崎門學なども一派である。其中にても陽明學は危険と目せられ、徂徠の古文辭學者には點行の正からざるものも澤山出來た。道德上風教上朱子學を以て正しきものとしたのである。朱子學は讀書窮理實踐躬行を事として居るからである。

### 陰陽道とは何か

陰陽道とは天文曆數を考へ、或は天變地異を察し以て吉凶祥災を知り、占相祭禳などを行ふの道であつて、我が邦では此れまで盛んに行れたものである。支那では陰陽の説が盛んで陰陽品行によりて、吉凶禍福を斷せんとする思想があつた。先秦時代已

に陰陽學なるものがあつた。漢書藝文志に曰はく陰陽家者流は、蓋し義和の官に出づ。敬んで昊天に順ひ、日月星辰を歴象し、敬んで民に時を授く。此れ其の長ずる所なり。拘者之を爲すに及んでは則ち禁忌に牽かれ、小數に泥み人事を捨て、而して鬼神に任ずと。我が國には『日本書記』によると、推古天皇の十年に百濟の僧歡勒が初めて、之れを傳へ、後吉備眞備歸朝して亦之を傳へ、斯の道も漸く行れ來たつた。奈良朝時代には己に陰陽頭大津首及び大津大浦などの斯道に名ある人があつた。平安朝時代となつても亦陰陽頭藤原竝藤滋岳川人弓削是雄等などの陰陽家が相鍾いで出た。殊に宇多天皇の朝に出た、陰陽師賀茂忠行の如きは、吉備眞備五世の孫で斯道に通じて居た。安部晴明は忠行の教を受けた者である。爾來賀茂氏と安部氏とは斯道の宗長だ。安部晴明の著として傳へらるゝ篋篋或は金烏玉兔集と云ふ書などは、其ればかりが書いてある。

## 心學とは何んぞや

宋代の哲學も心を論ずるから心學といへさうだが、此れは日本の徳川時代に起つたものである。徳川氏武士の社會には儒教あり武士道あり、又神道禪宗などある。然るに一般平民社會には何等の教訓もない。ために風俗は大に頽廢した。心學は實に此必要に應じて起つたものである。京都の人石田梅巖の創唱したる處で、享保の末年のことである。此時にはまだ心學の名はない。其の門人手島堵庵の時に手島學の名起り、先づ京畿に傳播し、堵庵の高足中澤道二は江戸に來りて、老中松下定信の薦めによりて心學と命名した。他の心を研究せんとする學問、例へば陽明學禪宗と區別せんため、石門心學と名付けたが、遂に單に心學として行はるゝ様になつた。心學とて別に一派の學說ある譯でなく、只だ神儒佛等に亘り、通俗的に人の教を説いた迄である。四書、小學、五經などは其の重なる材料だが、宋代の性善説は殊に深く用ひられた。人間に

は良心道心りやうしんだうしんといふものがあると教ふるが一般であつた。此心このこころを明かにすることを教ふるを以て根本とする處から心學しんがくの名も出た。然かも日本の神を崇敬し、神かみを信仰しんかうするは己れの心を清淨せいじやうならしむるに在りとし、又佛法またぶつぽふの因果いんぐわの説をも信じて居る。

心學者は高座に在つて講釋きやうしやくする。諸所しよしよに其場がある。京都きやうとの五樂舍りくしや、明倫舍めいりんしや、觀行舍くわんぎやうしや、心學舍しんがくしや、大阪おさかの茶寛舍ちやくわんしや、河波舍かゝしや、靜安舍じやうあんしや、敦厚舍とんこうしや、江戸えどの參前舍さんぜんしやなど有名である。五樂舍ごらくしやは梅巖ばいがんの塾舍じゆくしやで、明倫舍めいりんしやと共に今日迄其命脈を保つて居る。參前舍さんぜんしやは道二が江戸えどに來て建てたもので、今日こんにちでは下谷二長町しもやにちやうまちに其形體そのけいたいを留めて居る。

### 日本に於る諸種の學派を擧げよ

日本にほん徳川時代とくわんじだいには種々の學派が出來た。

一、朱子學しゆしじやく 藤原惺窩ふぢはらせいゝわを始め門人羅山之を學び遂に幕府ばくふの正學せいがくとなつた。此れにも亦小分けがある。

二、陽明學やうめいがく 始めて中江藤樹なかつかえとうじゆの傳へた處で門人熊澤蕃山くまざわばんざんによつて承繼しやうけいせられた。

三、古學派こがくぱい 宋代そうだいの理學りがくに反對したもので、常識じやうしき的に儒教を解さんとするものである。山鹿素行やまかすけい、伊藤仁齋いとうにさい、物徂徠ぶつそらいなどは其の流義だ。一に復古學派ふこがくぱいともいふ。

四、獨立派どくりつぱい 何れの學術がくじゆつにも偏せざるものといふ。二宮尊徳にのみやうんとく日出の帆足萬里ふみそまんり豊後の三浦梅園みづらばいゑんなどは是れだ。

五、老莊派らうじやうぱい 此れ老莊の學を講ずるもので日田ひつたの廣瀬淡窓ひろせたんそうは其の一人である。

### 忠孝一本の意味如何

日本に於て忠孝ちゆうかうは一本である。と云ふのは忠も孝も其結果そのけつぐわいに於ては一致するし、又其動機そのどうきに於ても衝突する所がないと謂ふのである。忠は即ち孝、孝は即ち忠、兩者りやうしやの間に動機どうきに於ても結果けつぐわいに於ても、矛盾衝突むじゆんしゆうつうのないことを謂ふのである。忠ならんとすれば孝かうならず、孝ならんとすれば忠ならずと云ふのは、單ただに皮相的ひさうてきの見解であつ



て、其根本に立入つて見れば、忠孝は必ず一致すべきものだと云ふのが忠孝一本説の根本である。

此説は藤田東湖先生の初めて唱へたものであるが、如何なる所より説明するかと云ふに、吾が日本は氏族制度であるから、忠孝一本が自から行はれるのである。氏族の祖先即ち氏神は何れも皇室に對して忠義の念を有つて居つたものである。氏神を祀れる所の吾人子孫が亦祖先の心を以て心とするときには、必ずや皇室を尊ばざるを得ないのである。是れが即ち動機の上の議論であつて、祖先を尊ぶ位の人情のある者であつたならば、必ず其人情の根柢に反つて以て皇室を尊ぶやうならなければならぬ。祖先に事へるのは即ち孝である。親に事へるばかりが孝と云ふのではない。親に事へることとは勿論孝であるけれども精神が何處に在るかと云へば、矢張り祖先に孝ならんとする處に在るのであるから、祖先の心を以て我が心と爲し、皇室に對して忠義を盡すと云ふことが即ち忠孝の根柢に於て一致する所以である。

又之れを結果の上から言ふたら如何うか。若し君の爲めに努力するときには、即ち祖先の名を顯はし、自己の名を顯はすことが出来るからして、其結果自から親に孝なることになる。親の口腹の慾を満足させることばかりが孝でない。必ずや祖先や親の心の喜ぶ處を爲さなければならぬ。最も喜ぶ處は言ふ迄もなく、善良なる日本人となつて名譽を發揮し、何人と雖も非難することの出来ないことと云ふやうな人になることが親の最も喜ぶ處に違ひない。して見れば忠孝は其結果に於ても矢張り一致することになる。又親に事へる方面から觀れば如何かと云ふと、眞に親の爲めに孝を盡さんとする者であつたならば、必ずや皇室の爲めに忠義を盡さなければならぬ。皇室の爲めに忠義を盡すことは即ち親に孝なる所以となるのである。

此の如く論ずるときは忠を以て孝の方便手段と爲す嫌があるけれども、是れは見方の相違である。孝と云ふ文字は親に事ふることを以て眼目としたものである。忠といふ文字は君に仕ふることを以て、眼目としたものである。親に事ふる方面から言へば、

忠も其中に這入つて來るといふのであるから、手段方便と考へるのは己むを得ない。それから君に仕ふる方面から言へば、親に對することも其中に這入つて來るから、孝が方法手段となるのは亦己むを得ないのである。孰れにせよ日本人の理想とする所は忠孝一本に存在するのである。

元來人の欲望には皮相的なるものもあるし、又深奥的なるものもある。皮相的なるものは、所謂迷妄の類であつて、何人も心から之れを望むのではない。悟らない人間が之れを望んで居るに相違ない。眞に悟つた人間ならば、必ず深奥なる欲望を満足せんとするに相違ない。之れを子供に譬ふれば六七歳の時は、蟬や蜻蛉を捕まへて喜んで居る。之れを奪はれるといふと喧嘩口論を始め、泣き叫ぶが如き状態を演ずるが、大人より見れば極めて皮相的なる欲望に追はれたものである。此れと同じ様に一時の欲望に責められて悪事を働くやうなことをするのは、矢張り人間の眞に望む所でない。犯罪者は人間の眞の欲望を満足せんとしたのではなくして、つまり迷妄に出でたも

のである。此れと同じ様な譯で、我が日本に於て君に忠ならざらんことを希望するものはない筈である。君に忠ならんことを希望するのが、日本人一齊に望む所である。然らざるものは皆迷妄であるから、忠孝は其根柢に於て當然一致すべき性質のものである。

或は又忠孝を論ずるに本家と分家との關係を以てする者がある。即ち皇室は本家であつて臣民は分家である。故に臣民の皇室に對するや、須く尊敬の念を有つ可きだといふ者もあるけれども、一切の臣民が皇室の分家といふことは如何にも曖昧である。血縁上斯の如きことがあるべき筈がない。又吾々の祖先は氏族團體であつたとして、皇室は其中最も尊いものであつて、氏族團體は皇室より生れ出たものであるといふことは言ひ得ないであらうと思はれる。歴史に於て書いてない。又此の如き所から忠孝一本を説くといふと、直に外國の歸化人に應用することが出來ない譯である。日本は單に天照大神の子孫ばかりではなく、三韓支那より移住したものが澤山ある。其等は皆日

本の皇室に對して忠の觀念を有たないでも宜いといふことになつて來るから、さういふ意見は面白くないと思ふ。氏族團體の祖先が皆君に對する忠義を以つて其根柢として居つたといふことは、是は獨り日本の氏族團體に止まらず、外國より歸化せるものであつても、矢張り同じことであるから外國人にも當筈まる譯である。今日朝鮮人といへども、矢張り日本の文化を受けて日本の皇室に對する忠義心を有つて居るのであるから、亦之れを此に當筈めることも出来る譯である。此故に自分は忠孝一本の説明をするには、必ず氏族團體の祖先の心を以て心とする所に歸着すべき事と思ふのである。

新註古註とは何か

新註とは宋以後の註釋をいふ。宋以後は一種の哲學が發達した。其の思想から四書五經を解したものが即ち新註である。程子、朱子などいふ先生は其の代表者だ。古註は漢以後の註である。鄭玄馬融などは後漢の有名なる人だ。但だ唐代のは疏といふて註と言はないから古註の中には入れない。

支那思想一覽

先秦時代

管仲

學統 法家

著書 管子廿四卷管子の著と言はるれども僞託なり。

學說 (イ)王霸辨 道德を以て國を治むる者は王、權力を以て治むるものは霸。

(ロ)功利主義的政治論 文巧を捨てて實業を勤め以て富國強兵を來す。(ハ)覇者道德論 徳治と法治との間にあり、覇を重んじ八觀を怠らず。

孔子

學統 儒學、先王聖人の言行を集めて政治道德の説をなす。

著書 論語其の他春秋、詩を筆削し、易の十翼を作る。

學說 (イ)理想論 仁。(ロ)修爲論 樂を以て内心を陶冶し禮を以て行爲を規正す。

老子

(ハ)性論 三品説(上智、尋常、下愚) (ニ)政治論 徳化 制度國の三要素たる富教信用の制度を作る。(ホ)教育論 其の學科は六藝(禮、樂、射、御、書、數)六經(易、書、詩、禮、樂、春秋)啓發主義(不憤不啓、不悱不發)

學統 道家、從來の格言を集めて大成す。

著書 道德經、上下二篇。

學説 (イ)本牀論 無を以て本牀となす。(ロ)生成論 萬物無を以て生ず之を一、樸、谷神、天地の根などいふ。(ハ)修爲論 無なる如き情調を以て理想とす。即ち虚無活淡にあり。(ニ)政治論 無爲放任主義にして文化未だ開けざる原始社會を理想とす。

墨子

學統 墨家、拜天宗、鬼神論より來る。

著書 墨子、解し難き處多し。

學説 (イ)天意説

兼愛 社會結合の原理  
天意 恭義、物質上の富  
利 方法、節葬、節用、非樂

(ロ)否命説 有命と言へば人民勉めず故に否命説を唱ふ。(ハ)鬼神論 政策上より鬼神の存在を主張す。

子思

學統 儒家、孔子の孫、曾子に學ぶ。

著書 中庸

學説 (イ)中庸論 中庸は即ち道德なり。(ロ)誠論 誠は道德の本體なり誠ならざれば物なし。(ハ)人性論 至善を明かにし之を擇んで固く執るなり。人の性に生知安行、學知利行、困知勉行の別あり。人性は善的なり(天命之謂性)

列子

學統 道家

著書 列子、確かならず

學說 (イ)生成論 無より渾淪となり一となり七となり九となり萬物を生ず。(ロ)必然論 一切萬物必然の運命を有す。(ハ)無我論 生死は因果的現象なり、共に深く喜憂すべからず。人は自由に行爲し得るものにあらず。意志は必とすべからず、我と思ふは誤なり。(ニ)修爲論 世間的慾望と俗縁とを全く斷ち自然に一任して天地間の一公民たらんとす。

揚朱

學統 揚家

著書 揚朱(列子中に在り)其說孟子に散見す

學說 (イ)宇宙觀 一切の現象は必然的にして自由の存することなし(因果的宇宙

觀)(ロ)人生觀 生死命あり抗すべからず、死すれば賢愚土壤となるのみ。

(ハ)快樂主義 世俗的慾望を去り心身の四苦を捨て放浪自恣の生活に自己快樂を求むべしとせり。(ニ)非社會主義 各人天賦の性を養ひ身を保ち己を愛したらんには天下自ら治る我が一毫を抜いて天下を利するなく天下を擧げて我に奉ずるも取らず。

騶冠子

學統 折衷派(黃老法家儒家兵家)

著書 騶冠子

學說 (イ)宇宙論 道あり意を生じ圖を生し形事約と漸次派出して時節到來終に萬物生じて萬事起る。(ロ)則天論 政府組織は天に則り政治亦天に日月あるが如く賞と罰とを行ふべく四時あるが如く人民を検すべし。

申子

學統 法家

著書 申子

學說 (イ)本領 法治主義。(ロ)方法 君主は無爲にして靜虚たれ嚴密に法術によりて民を治むべし。

孫武

學統 兵家(支那兵法の白眉たり)

著書 孫子十三篇

事蹟 齊の人なり吳王闔閭に事へて將となるに及び吳強大となる。

吳起

學統 兵家

著書 吳子六篇

事蹟 衛の人にして兵をよくす。魏文公間に事へて後楚に事ふ吳子楚に入るに及びて楚の強きこと天下に顯はる。

鬼谷子

學統 縱横家(蘇秦張儀この門より出づ)

著書 鬼谷子二篇

學說 (イ)道 道は天地を作成し彌綸するものにて名けて神靈と言ふ凡そ天地間の現象は一定の法則によりて支配せらるる之を知るを眞人と云ふ。(ロ)心 道を知るものは心なり心は口より出入す故に口を慎むべし。

莊子

學統 道家にして老子列子に繼いで出で最も精密に其の説を組織せり。

著書 莊子内篇(確實)外篇雜篇

學說 (イ)絶對論 道は矛盾相對を絶す是非大小正邪を言ふは朝三暮四の流のみ齊

孟子

物論の起る所以なり。(ロ)養性論 亂世に於ける處世の法を教へ何等待つ所  
なからんことを期す列子風に御して行くは尙待つあるなり。

學統

儒家孔子の學曾子より子思に子思より孟子に傳はる。孟子孔子を祖述し別に  
自ら發明する所少からず。

著書

孟子

學說

(イ)性善説 人に四端の心あり惻隱羞惡辭讓是非是れなり之を良知良能の二  
方面より見るべし。故に人の性は善なり其の惡なるは物欲に陷溺するがため  
のみ、良心の意的方面を良能と言ひ知的方面を良知と言ふ。(ロ)仁義論 揚  
墨の説に對抗せんがために唱へしものにして孟子道德説の二大綱目なり。  
(ハ)修爲説 欲を制し浩然の氣を養ひ放心を求めて夜氣を存すべし。(ニ)政  
治論 仁政即ち不忍人之政は井田の法を以て第一とす。

公孫龍

學統

詭辯家

著書

公孫龍子十四篇

惠施

學統

詭辯家

著書

荀子

學統

儒家孔子の學の子夏によりて傳へられたるもの荀子に至る。

著書

荀子三十三篇

學說

(イ)性惡論 人の性は惡、其の善なるものは偽、人爲と言ふ程の意なり。  
(ロ)辨證論

性惡 積極的論證 (1)生理的欲望ありて耳目の快を求む (2)利己心強し (3)人情甚だ美しからず  
 消極的論證 (1)天性の儘に放任すれば小人となる (2)善を欲するは善の缺乏を意味す (3)禮刑は性惡を豫想す

(ハ)禮 禮は國家及個人の治めらるゝ所以のものなり。

禮の淵源 客觀的 天地、先祖、君師、理  
 主觀的 人情………情

(ニ)樂 禮は欲を制する所以にして樂は欲を善導し情操を陶冶する所以なり

尸子

學統 雜家(儒墨折衷)

著書 尸子

學說 治國を以て本領となし之を實現する唯一方法として義を唱ふ。

呂子

學統 雜家(儒、墨、道、天文、兵、農六家の調和)

著書 呂子春秋

學說 社會の最大目的は利なりとし人は利によりてのみ結合す故に爲政者はこれを利用するを要とせり。

商子

學統 法家

著書 商子三十五篇

學說 (イ)本領 富國強兵に達する方法として法術を重んじ刑を嚴にす。(ロ)法制の更定 民を組み立て伍となし惡あらば官に告げしむ。(ハ)農本主義 學問によりて官に上る途を塞ぎ交通を塞ぎ逆旅を廢し農の商に轉ずるを許さず。

韓非子

學統 法家韓の諸公子にして刑名法術の學を喜ぶ嘗て李斯と共に荀卿に學ぶ老子と

荀卿とを調和す。



著書 韓非子五十五篇

學說 (イ)法律論 法律至上主義にして君主は法律にて治む心にて治むべからず。民は勢に服すれども仁に服せず。(ロ)政治論 權力は治國の要件にして法と刑とは權力の本源なり。されば人君は好悪なく賢に任ずることなく法によりて人材を登庸し自らは虚静なるべしとせり。

漢時代

陸賈

學統 儒學派

著書 新語

學說 仁義を奨励し禮樂を尊び先王の道を崇敬す。

賈誼

學統 儒學派

著書

學說 實際的思想にして改正朔、色尚黄、數用五等のことを主張せり。

淮南子

學統 哲學派(道家を根本として之に儒、兵、法の諸家を調和す)

著書 淮南子

學說 (イ)本體論 道を假定して本體となし之を虚的靜的に寫象せり隨て人の本性も亦静虚なりとせり。(ロ)倫理論 靜なる人の本性を損はんとする慾望を抑へ性に率つて行動し本體に合するを以て極致とす。

董仲舒

學統 儒家

著書 春秋繁露

學說

(イ)天人合一說 天は萬物の本源にして吾人の父なり且又道の源泉たり。故に天人同形なり。(ロ)政治則天論

天陰—司殺—罰—冬—不用の地—北方—政治  
陽—可生—德—夏—化 育—南方—政治

(ハ)官府則天論

天 三光 日…天…暑 公(3) 卿(3)  
月…地…寒 …天子 公(3) 卿(3)  
星…人…和 …公(3) 卿(3) 大夫(3)  
四時—春夏私冬 …公(3) 卿(3) 大夫(3) 士士士

(ニ)倫理則天論 五行相生の順序に並ぶれば父子相承の貌となり父の志を全ふせしむること孝の徳となる。(ホ)人性論 人性は善の可能性を有すれども教育して善となる。

劉向

學統 儒家

著書

劉向說苑、劉向新序、

學說

人性を解して人は生れながらにして善悪なく外界の影響によりて善ともなり悪ともなると言へり。外來の影響中最も注意すべきは音樂なりとせり。

揚雄

學統

儒家(易と老子との思想を調和せんとせり)

著書

太玄、法言

學說

(イ)形而上學 宇宙の本體たる玄は自働的精靈的のものにして現象界を支配す其の之を支配するや三數の標準による。萬事は三方面三階段あり。(ロ)性論 人性中には善惡の二因子あり善を養へば善人となり、惡を養へば惡人となる。

班固

學統

前漢書の著者班彪の子なり。

支那思想一覽

著書 白虎通(學者を監督して作る)

學說 人(性(陽氣)……仁……義禮智信(五行の氣)  
情(陰氣)……貪……喜怒哀惡愛樂(六律の氣))

王充

學統 班固の父彪の門人なり。

著書 論衡八十五篇

學說 氣を以て人の本性となし厚薄に従ひて人間の運命も別るゝものなりとせり。  
一元氣論なり。

王符

學統

著書 潜夫論三十餘篇

學說 天を崇敬し天子を以て天吏とせり又一元氣論を承認せり。

馬融

學統 儒家

著書 忠經

學說 忠孝一本説 忠と孝とは本質を同じうす忠を盡せば孝となる而かも忠なるた  
めには先づ孝悌ならざるべからず。

天隱子

學統 神秘説

學說 人は自然の靈氣を受けて生る。靈氣は人の本性なり、故に人は漸門によりて  
其の行爲靈氣と冥合するの域に達す可なり。

除幹

學統 儒家(揚、墨、申商を排せり)

著書 中論二十篇

支那思想一覽

學說 亂世の時に當りて儒教の仁義説を鼓吹し道德的政治論を建設せり。

抱朴子

學統 老子を以て主となし當時盛なりし神仙家の思想をとり入れたるものにして厭

世思想の代表者なり

著書 神仙傳十卷、隱逸傳十卷、抱朴子二卷、

學說 (イ)哲學論 宇宙の本體は圓滿にして一切現象を顯はすものなり名づけて玄と言ふ。(ロ)修爲論

玄—神仙 道を修めて絶對と冥合すること

藥を飲みて絶對に達すること

關明

學統 易の二原理より一步を進めたる揚雄の三原理を繼承せり。

著書 洞極真經一篇

學說 三を以て根本原理となし天生地育人資を立てたり。

顏之推

學統 儒家(佛教を入れて儒教と調和せんとせり)

著書 顏子家訓

學說 (イ)家族論 一家の三親を以て夫婦父子兄弟となす此等は家族の根柢なるを以て最も平和を守らざるべからずとなす。

(ロ)儒佛調和論 佛教を内典とし儒書を外典とす。

張融

學統 三教調和論

著書 洞源

學說 三教一致論 佛家の真如、道家の虛無、儒家の道共に一個の實在にして其の根本主義は一なり。



せり。

周子

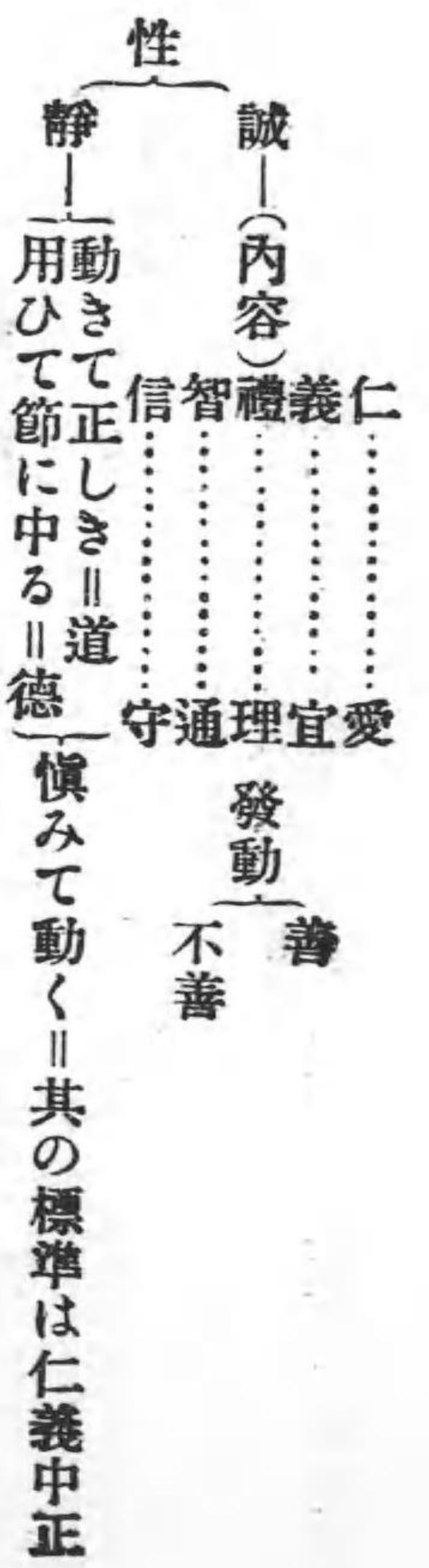
學統 天地無より生ずとなせる道教の思想と儒教の二氣五行説とを調和して太極圖説を作り宋代新哲學の端緒を開けり。

著書 太極圖、太極圖説、通書、遺文九篇

思想 (イ)宇宙論 (生成の順序)



(ロ)道德論



(ハ)修身の工夫

思 動く處を慎む  
 寡欲 靜 虛 明 通 博 極致 聖人

邵子

學統 孔子の道を以て自ら任すれども必ずしも老子派を排斥せず。

著書 皇極經世書六十四篇、先天圖、別に漁樵問答一篇あり。

學説 (イ)法則論 自然界の法則と精神界の法則とは畢竟同一にして吾人の必然的  
 なりと感ずるものなり而して其の根本的なるものは加一倍法なり即ち太極よ

支那思想一覽

り兩儀生じ更に四象八卦を生ず。(ロ)陰陽論 道即ち太極より開展して陰陽生ず。道は陰陽の無差別的未分化的方面にして陰陽は道の發現的方面なり。(ハ)現象論 陰陽が二なる數によりて支配せらるゝが如く現象は四の數によりて支配せらる。

説明法 一直線上に四數の順序に進むもの…春夏秋冬  
 累進的…元、會、世、運、  
 空間的にして物象に應用せるもの…天、日月星辰  
 地、水火土石

張子

學統

普く諸子の説を研究したれども満足せず。後程子に遇ひて道統の要を語る。乃ち悉く異學を棄つ。

著書 正蒙

學說

(イ)太虛論

太虛 自動的方面 内含的に活動性あり  
 本性の方面 虚明 太虛は實存する氣なり疑集して物となる

(ロ)心性論 人は太虛の疑集なるが故に其の性や虚明なり(天地の性)。されど疑集の際清濁の別を生ずるを以て各人氣質を異にす(氣質の性)。又人物若しくは物々相接することによりて知覺を生ず。これを指して心と言ふ。(ハ)道德論 個人的特性たる氣質を變却して小我を去り以て天と冥合一致すべきなり。

大程子

學統

明道千四百年の後にいで孔子の學を繼承し仁を以て其の學の中心とせり。之れに加ふるに易の思想を以てし生々之れを仁とせり。

著書

二程全書の中にあり。

學說

(イ)宇宙論 生々一原論活動の原理。(ロ)性論 性は生にして一元の氣に外ならず。故に善なり。(ハ)工夫論

小程子

工夫 { 去邪(主一無適、爲學) / 敬(以て物欲を去る) }  
體認 妄(内外) 識仁

學統 明道と共に學を周子に受く伊川は明道の言ふべくして言はざりし所を明瞭に  
掲出して二元論を唱へ宋儒理氣論の淵源をなす。

著書 易傳四卷宋志九卷、詩文數十篇、

學說 (イ)理氣二元論

理：形而上：普遍原理 人 理：性||萬人一樣 善：發動||情(未發|惡) 己發|善 不善  
氣：形而下：個別原理 氣：才||氣稟厚薄 善||清氣 惡||濁氣  
(ロ)性即心 理即性性即心なり只性や理の人にあるものにして心は其の身に  
主たるより名づけたるものなり。而して心は人の生を遂ぐる所以の道なり。  
(ハ)沖漠無朕說 倫理の法則に内外なきを主張せるものなり。(ニ)工夫論

謝上蔡

寡慾窮理(讀書して義理を知り古今の人物を論じて是非を分ち事物に應接し  
て其の當を處す) 眞識、坐禪入定、主一無適

學統 二程子に學びたりと雖も特に明道を繼承し心を中心とせり陸象山に多大の影

響をなせり。

著書 論語說、上蔡先生語錄

學說 (イ)根本思想 心は仁なり仁は活なり。(ロ)修爲論 心を蔽ふて其の尊大を  
傷くるものは人欲なり。これを去るには窮理にしくはなし。

胡五峯

學統 謝上蔡楊龜山と交り深し、故に程門の影響を受くること大なり。

著書 知言、詩文皇王大紀

學說



朱子

(イ) 聖道 躰 || 性 : 靜虛的 — 大本 — 絶對善 — 發動すれば心となる  
 用 || 心 : 活動的 — 天地を知り萬物を宰し以て性をなすもの  
 (ロ) 善惡の別 心、情、才、慾の發動して節に中ると否とによりて生ず。

學統

李延平と共に羅豫章に學ぶ故に其の學伊川の影響を受くること大なり。其の學深遠所謂朱子學の根柢をなせり。

著書

大學中庸章句或問、太極圖解、通書解、易本義啓蒙論語集註、孟子集註、楚辭集辨證、韓文考異、近思錄、伊洛淵源錄、中庸輯略等

學說

(イ) 哲學說  
 太極 || 理 普通原理(形而上) 人 || 理 精 聖人  
 氣 : 個別原理(形而下) 粗 物 || 理 粗 凡人  
 粗 氣 || 精 物 || 階級

(ロ) 心性論

性 — 人 理 || 本然の性 仁義禮智信皆具備す  
 氣 || 氣質の性 : 氣稟 清 — 聖賢 濁 — 昏愚

心 本質 氣 || 精爽なる氣 一身の主宰衆理を具へて萬事に應ずるもの  
 種類 道心 || 理によりて刺動せられしもの : 惻隱羞惡  
 人心 || 氣によりて刺動せられしもの : 一切昏愚 萬人に共通なり

(ハ) 工夫論 格物窮理(究理) — 讀書 — 循序致精 — 居敬持志(夜氣を存す、靜座

陸象山

學統

陸子の家學は皆簡易直截なり其の遠因は謝上蔡を通じて傳はれる明道の學風なり。この學風流れて明の陽明に至る。

著書

象山全集

學說

(イ) 立脚地 性善說を信じ理の普遍にして氣に厚薄あるを信せり。(ロ) 心即理 人心道心の別を排して心は理のみとせり。(ハ) 工夫論 窮理(物欲を去

つて本心を明かにす) 思之(自立自重)

張南軒

學統 胡五峯に學びしかど其の説を信せず二程子を尊信す。

著書

學說

義利の辯、爲めにする所ありて爲すものは利、爲にする所なくしてするものは義、義利の別行爲にあらすして動機にあり。

陳龍川

學統

朱子派の弊空疏に流るゝにありとして大に之を排斥す。

著書

中興論、酌古論

學說

經濟を尊び功利を重んず。

葉水心

學統

朱子氣理の説に反動して起てるものなり。

著書

水心文集二十八卷、習學記言五十卷、拾遺一卷、別集十六卷

學說

宋代の學者の説孔子の要領を得たるものにあらずとして大に尙古主義を唱導せり。

陳北溪

學統

朱子の門に入りて學び朱子派の有力なる後繼者となる。

著書

性理字義

學說

(イ)太極論 太極は圓なり又曰く太極は萬理の總腦する所故に理も又一太極なり。(ロ)心の説 心は理と氣とを合したるもの其の活動し得るは氣あるを以てなり。又理は善のみにして氣に善不善ありとせり。(ハ)情の説

性	仁	惻隱
禮	羞惡	情
義	發動	本性の儘に發動す
智	辭讓	善節に中る
	是非	人欲に遮ぎらる
		惡節に中らず

楊慈湖

學統 象山の學風を受け之れを繼承し之れを擴張せり。  
著書

學說 天地は我の天地、變化は我れの變化なりとして絶對的唯心論を説けり。

許魯齋

學統 元代思想界に於ける稍出色のものにして伊洛の説を尊信す。

著書 魯齋心法、魯齋全書

學說 修爲法として治心と持敬とを擧げたり持敬の要に曰く「千萬人の中にありと雖も常に己あるを知る」と。

吳草廬

學統 朱陸の調和學派にして徳性を主とし問學を後とす。

學說 (イ)氣一元論 氣は原始より無終に實在し天地萬物を作出す理は氣中の條理

のみ。(ロ)徳性の智と聞見の智 客觀的に理を聞見するは主觀的に知る所以とせり。

吳康齋

學統 朱陸二家を調和せんとせり其の學枯禪を帶ぶ。

學說 修爲法は其の説の中心點なり。之を要約すれば天理を存し人欲を去ることとなる。

胡敬齋

學統 吳康齋に學んで朱學的方面を繼承す枯禪的なり。

學說 朱子の理氣説を信じ修爲法として持敬を重んず。

陳白沙

學統 學を康齋に受けて其の陸子的方面を繼承す實際的なり。陽明この人の門より出づ。

學說 向內的思索を獎勵して曰く「人所<sub>ニ</sub>以學<sub>一</sub>者欲<sub>レ</sub>聞<sub>レ</sub>道也。求<sub>ニ</sub>之書籍<sub>一</sub>而弗<sub>レ</sub>得。則求<sub>ニ</sub>之吾心<sub>一</sub>可也と。

王陽明

學統 陸象山を以て正學の系統となし、傍ら知行合一論に於いて程伊川の思想を取り入れたり。明代以後第一流の學者たり。

著書 陽明全書傳習錄

學說 (イ)知行合一 知行兩者の間には必然的協同的連絡ありて二即一的關係を有するものとせる見解にして其の淵源伊川に出づ。其根柢は力學的なる理を假定せる所にあり。(ロ)心即理 象山の説を其の儘に繼承せり。(ハ)致良知 心の本體の虛靈明覺なる處之を良知と云ふ。心即理なるが故に良知は理の善惡を識別する方面の名なり。故に良知を致せば百行悉く節に中るべきなり。(ニ)仁說 心は即理にして理は萬物を生せしむる所以のものなるが故に仁なるを格物となす。

り。今一切萬物を愛すれば一切萬物と我仁(即ち本心)と一體なるべし。故に仁を致せば我と物と天理と冥合すべし。(ホ)修爲論 坐禪・誠意・致知・格物(物は事なり倫理的行爲なり、格は正すなり、即ち自己の行爲を正しからしむるを格物となす)。

羅整庵

學統 宋儒が理を力學的に解するを排して形式的抽象的のものとなせり。

著書 困知記

學說 (イ)氣一元論 天地に通じ古今に亘り一氣にあらざるはなし理は氣の條理にして氣によりて立ち氣に附して行はる。(ロ)理一分殊說 一物の生ずる氣を受くるの初め其の理一のみ成形の後其の分即ち異れり其の分の異なるも自然の理にあらざるなし。其の理の一は常に分殊の中にあり。

### 日本思想一覽

#### 朱子學派

##### 藤原惺窩

學統 惺窩幼にして佛門に入りしが後還俗して儒學を研究し程朱學勃興の木鐸となつた。

著書 惺窩文集、惺窩和歌、文章達德錄、文章達德錄綱領、千代もと草、

學說 (イ) 哲學說

理 天にありて物に賦せざるもの || 天道・元亨利貞 || 天地の心  
人心に具はりて事に應せざるもの || 性：仁義禮智 || 我が心  
共通

(ロ) 心理說

人心 (性 || 先天的のものにして天地萬物と共通  
人欲 || 後天的のものにして人善きもの (慈悲) || 本心を明かにす  
心を動かす所以のもの (惡しきもの (盜賊) 本心を蔽ふ

(ハ) 倫理說 信即ち正直と慈愛とを以て精神を鍛鍊し以て修身齊家治國平天下の功業をなすの本務ありとした。(ニ) 學問說 學問の目的は己を修むるにある。其の方法は言行を一致にし忠孝を勵み萬物に對して仁を致すにある。

##### 林羅山

學統 學を惺窩に受け程朱の學を尊信し遂に斯學を以て官學たるに至らしめた。其の子孫代々儒者として顯はる。

著書 羅山文集、羅山詩集、儒門思惑錄、道統小傳、經典載筆、

學說 (イ) 哲學說 周子の太極圖說をとりて其儘自家の生成論とした。(ロ) 倫理說 理想的人格のもの之を大丈夫と言ふ。大丈夫は聖賢にして豪傑を兼ねたり。此の域に達するには敬を以て信を行ふを要す信を求むるに道あり内に省みて

性を知り性に率ひて獨を慎む。(ハ)道德説 長幼君臣、上なるは下を憐み下なるは上を敬す。(ニ)宗教論 神儒兩道の調和を唱へ老佛並に耶蘇を排斥した。

木下順庵

學統 松永尺五の門に入り程朱の學を修めた。其功績は直接學統を立てし上にあらで教育によりて人材を出し間接に學問界に貢獻したに在る。

著書 錦里文集、班荆集、

雨森芳洲

學統 順庵門下の俊秀にして朝鮮語支那語をよくした。德行甚だ努む。

著書 橘窓文集、橘窓茶話、芳洲口授、たはれ草

學説 (イ)三教調和説 老佛は形而上の教にして儒は形而下の教、立教異なるありて自修一ならずと雖も理は一である。(ロ)義利の辨 義を以て目的とすれば自

ら利あり、利を目的とすれば利ならず。(ハ)爲學の目的 學はこれ人たるの學である。(ニ)神道尊重 國體の尊嚴を述べ。

安東省庵

學統 順庵の門に入りて程朱の學を學ぶ。又朱舜水に遇ふて其の影響を受く。

著書 省庵遺集、耻齋漫録

學説 (イ)哲學説 氣的一元論にして理は只だ氣中の條理のみとした。(ロ)修爲論 仁に志し言を慎み己を虚しうして道を學ぶべきを唱ふ。

室鳩巢

學統 順庵門下の神童を以て聞えた。確く程朱の學を信奉し徳望一世に高かつた。

著書 鳩巢文集前篇後篇補遺、鳩巢集外纂、駁臺雜話、書批雜錄、赤穂義人録、大學和歌、鳩巢經説、献可録、西銘解義、六論衍義大意、五常五倫名義、士説、國喪正議、鳩巢小説。

學說 (イ)人性論 自足的にして且絶對善なる本體我を蔽ふ處の私慾を去れば靜虛動直とて勉めずして中り思はずして得るの狀態に達す。(ロ)三大恩說 親君聖人の恩を三大恩となす。(ハ)仁說 仁は心の徳、愛の理五常の本源なりとして最も尊んだ。(ニ)義說 義、生命、財産は人の最も重んずる處である。就中義を以て最貴最重のものとする。この觀念より武士道を論じた。

中村惕齋

學統 京都の商家に生れ獨立して程朱學を研究した。性溫厚篤實にして甚だ學問の通俗化に努む。

著書 講學筆記、四書筆記、四書鈔記、五經筆記、讀易要領、三器考略、三器通考、姫鏡等

學說 (イ)仁愛の説 人は天地生物の理を得て生ずるが故に生理心に備はる名づけて之を仁と言ふ。仁は發用して愛情となる。人仁によりて行へば公平なるを

得て天地の心と合體す。(ロ)存養省察の説 斯心を操存して之を涵養するを存養と言ひ警省檢察してその發用を誤らしめざるを省察と言ふ。(ハ)死生觀 其死果して是なる時は則ち義正しうして遺體を耻しめず。故に孝である。但し生死の境に處しては就く處を考へて後自若として行ふべきである。

貝原益軒

學統 益軒別に常師なし、獨學して大儒となる。初め朱陸二家を尊信せしも後陸子を排して朱子を尊び後年又朱子をも疑ふに至つた。

著書 慎思錄、大疑錄、初學知要、自娛集、小學備考、近思錄備考、自譬編、五常訓、大和俗訓、和俗童子訓、初學訓、養生訓、家道訓等

學說 (イ)宇宙論

氣 運動變化作用ありて生々不息の方面  
 より名づく  
 本質論 || 唯氣論 (活動力) 理 生成收藏條貫ありて紊亂せざる方面  
 より名づく  
 宇宙 生成論 || 氣 道 || 生理の狀態 (流行) || 太極 發動 || 陽 || 萬物  
 形而上 || 在天 形而下 || 着地

(ロ) 人性論 (性善論)

人性 性 || 本然の氣質 || 四徳五常の本體 本然の性 精氣 || 善き氣質の性  
 粗氣 || 肉體 || 私意 || 人欲 || 惡

(ハ) 倫理説 (則天論)

理 (仁、氣) の用 仁 (おはれみ || 陽) ..... 平等愛 ..... 元 ..... 春 在天 || 誠  
 義 (仁の節あるもの || 陰) 秩序差別 ..... 亨 ..... 夏 在人 || 信  
 禮 (仁の理あるもの) ..... 仁義より派生す 貞 ..... 秋 ..... 冬  
 智 (行通するもの) ..... 仁義より派生す 貞 ..... 冬 ..... 在人 || 信

(ニ) 道德説

報恩論 (人ば天地、父母、君主、人衆等の恩によりて育つ故に)

報恩は道德の第一歩なり

山崎闇齋

學統 闇齋初め佛門に入りしも野中兼山、小倉三省の勸めにより學を谷時中に受くるに及び還俗した。其學鬱然として一派をなし南學派中別に闇齋學派を生ずるに至つた。

著書 垂加草全集、垂加文集、文會筆録、朱易衍義、周子書、關異、仁說問答、白鹿洞學規集註、沖漠無朕說等

學説 (イ) 哲學説

水神 火神 木神 金神 土神 國常立尊 天照大神 (純) 素盞鳴尊 (偏) 神 (偏) 諸 (偏) 大 (偏) 大々 (偏) 冊尊 物人 (大々偏)

(ロ) 人物論

日本思想一覽



萬人同等 理||普通原理||本然の性||理的心||絶對  
萬人同根 說 氣||個別原理||氣質の性||氣的心||相對

(ハ)土金の教 本然神來の性は虚靈明覺なれども氣質の偏向により善變じて惡となる。故に土金の教によりて之を矯めなければならぬ。(ニ)敬内義外の說 其の淵源易及程明道に出づ敬以て内界を直うし義以て外界を方にせんとするの謂である。大學に所謂修身以上を以て敬となし齊家以下を以て義となすのである。

淺見綱齋

學統 崎門中最も氣節に富める人であつて勤王の志深く其の門人三宅觀瀾は水戸學派に入りて、其の著靖献遺言は維新當時の志士によりて、共に皇國のために大なる貢獻をなした。

著書 靖献遺言、六經備考、父母存說考、程子論性諸說、伊川先生四箴、辯大學非

孔氏之遺書辨等

學說 (イ)根本主義 人皆本體あれども生質の狂と生後の損ねにより偏向する所がある。故に偏向を矯めて己を修め而る後に人を治むべきである。(ロ)修爲論 知を以て是非得失を知り行を以て身を誠にす。知行をなすには敬を要す。  
(ハ)治人論 萬人同性なれば已れ修らば自然に人を感化するに至る。

佐藤直方

學統 闇齋に學びて其の奥を極めたが敬内義外の說に異議を唱へしより其の門を斥らる。晩年闇齋神道を唱ふるに及びて愈々遠かる。

著書 排釋錄、鬼神集、說講學鞭策錄、道學標的等

學說 敬内義外說につき闇齋に反し心を以て内とし身を以て外とした。

三宅尚齋

學統 尚齋學を闇齋に學び綱齋直方と共に崎門の三傑の一となつた。資性剛直獄中

にありて書を作り闇齋學の完成を圖つた。

著書

默識錄、狼寔集、白雀錄、太極圖說筆記等

學說

(イ)哲學說 宇宙の本體は理のみ、氣は理の體、理は氣の骨子、氣は理に根して生ずる。吉凶禍福天壽皆有生の初めに豫宣せらる。尙統體の神と各其の神との關係より天人合一論を説いた。(ロ)倫理說 人は天地の心を受けて生る。天地の心は生々化育なるが故に人は仁を施して博く人を愛しなければならぬとした。又良心錯誤を認めた。

玉木葦齋

學統

闇齋學を學びて其の神道を繼承す。但し直接闇齋より學ばず。

著書

玉籤集、原根錄、神代卷漢鹽草、神道日蔭草等

學說

我が固有の創世説によりて固有の神道を説かんとし儒佛老莊の經典を以てしては君臣の大道神明の妙理を説明し能はずとした。

柴野栗山

學統

初め後藤芝山に學びしも後東遊して林氏の門に入る。

著書

栗山文集、雜字類編、國鑑、冠服考證、聲賢圖像考、

事蹟

異學の禁を行ふに與かり一には幕府の文教を統一し二には學徒の氣風を改善した。

尾藤二洲

學統

中井竹川頼春水と交り程朱の學を好む室鳩巢を尊信すること頗る深かつた。

著書

正學指掌、素餐錄、冬讀書錄、靜寄餘筆、稱謂私言、中庸首章圖解等

學說

(イ)宇宙論 天を以て理となし太極、陰陽、帝、命、鬼神を以て名づけた。(ロ)人性論 太極は性、陰陽は氣息、帝は心、命は情、鬼神は魂魄である。性情心氣魂魄ありて耳目口鼻があるのである。(ハ)道德論 天の秩序より人倫を演繹し來りて耳目の欲を去るを以て人生の目的とした。

中村敬宇

學統 佐藤一齋に學びて其の朱子學の方面を繼承す。慶應二年英國に留學し明治元年歸朝した。

著書 敬字文集、敬字演說集、西國立志編、西洋品行論、

學說 (イ)造物主論 至極の力智善を有する造物主の存在することを因より因を推して説明した。(ロ)福德合一論 福に内心の福と外心の福とあり。有徳者は必ずしも外物の福を得ずと雖も常に内心の福を得るものであると論じた。

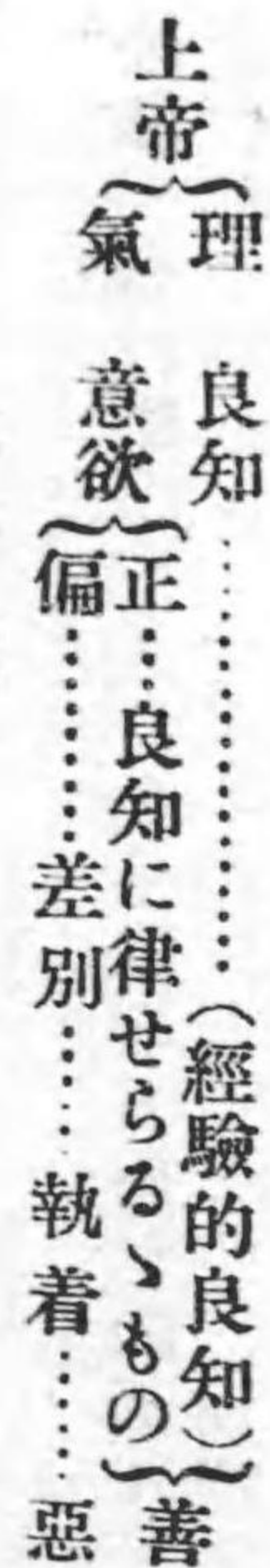
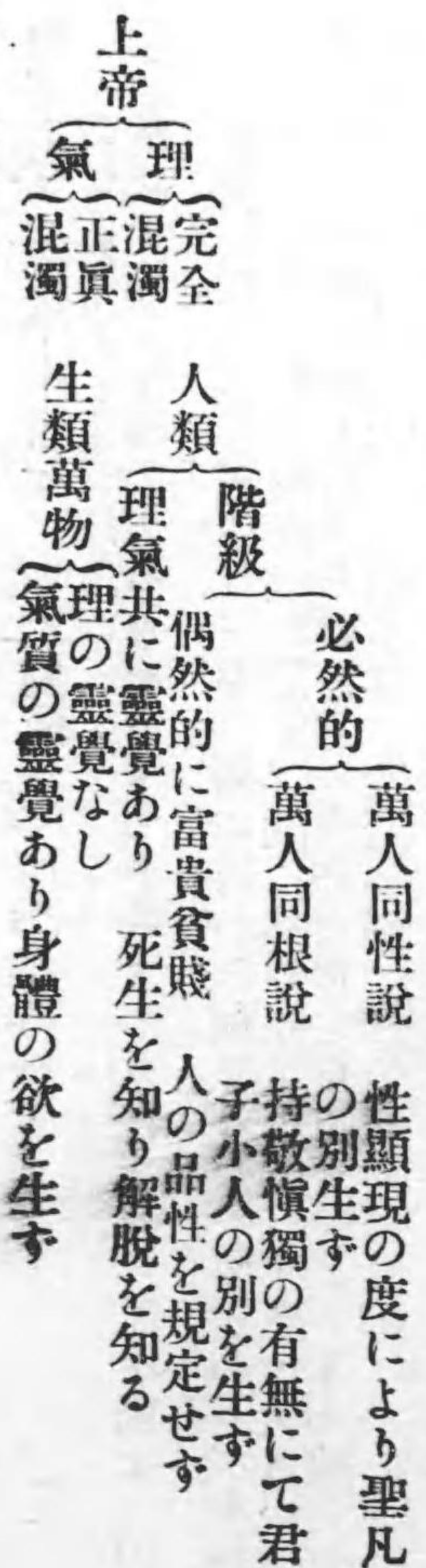
陽明學派

中江藤樹

學統 藤樹初め程朱の學を學びしも疑惑を生じ王龍溪語録を讀み更に陽明全書を讀むに及びて廓然として大悟した。實に本邦陽明學派の鼻祖である。

著書 翁問答、鑑草、孝經啓蒙、論語鄉黨翼傳、大學解、中庸解等

學說 (イ)哲學說 宇宙の本質は無極而至神なる世界精神であつて名づけて上帝といふ。上帝は如何に些細なることも知りて勸懲するに禍福を以てする故に人は持敬以て之に奉持すべきである。(ロ)人性說



(ニ)倫理說 良知を致すを以て人生の目的となす。其の方法は意を誠にするに

ある。格物致知は誠意に到るの道であるが格物は貌言視聽を出すの謂である。  
(ホ)道徳説 實賤道徳の方法として立志、誠意、自反慎獨、積小善の四者を  
擧げ其の標的として孝を掲出した。(ハ)神道觀(神儒調和説)

神道 體 正直……和  
心 愛敬……仁  
行 無事……勇(堪忍) 儒教

熊澤蕃山

學派 藤門中の豪傑にして事功派に屬す。故に其の學説よりは事業が大きい。

著書 集義和書、集義外書、大學小解、論語小解、二十四孝の評等

學説 自反慎獨の心法を重んず。又大に日本主義を鼓吹した。

大鹽中齋

學統 初め林述齋の門に入りて朱子學を修めしも後轉じて陽明學を學び中江藤樹を  
尊信した。

著書 古本大學刮目、洗心洞劄記、儒門空虛聚語、增補孝經彙註等

學説 (イ)太虛論 心境の靈明澄徹なる状態と形而下學的の空虛とを同一視した。

(ロ)良知論 太虛の善惡を識別する能力を良知と言ひ良知の内能あり本と天  
地易簡の知能と一物である。故に心即理である。(ハ)理氣合一論 形而上に  
ありては理は氣を含み形而下にありては氣は理を含む。(ニ)性善欲惡論 人  
性皆善である。然れども軀殼あれば氣質あり。氣質あるよりして物欲ありて  
惡を生ず。故に人は制欲しなければならぬ。(ホ)修爲論 弊源たる知覺聞見  
情識意見を掃除し以て致知格物しなければならぬ。

佐藤一齋

學統 大坂の中井竹山江戸の林簡順に學びて朱子學を修めしも陽明學を好み遂に陽  
朱陰王の態度をとるに至つた。その門人材頗る多い。

著書 言志錄、大學一家私言、古本大學旁釋補、孝經解意補義、愛日樓文集等

學說 (イ) 哲學說 宇宙の本質を以て氣一元となし體より言へば理、用よりいへば氣なりとし運命の必至を信じた。然れども吾性の性たる所以のものは死生の外に超越するものとして生々不息の説をした。(ロ) 倫理說

人 心 天 無形(通)善 過不及なきもの  
軀 地の精爽 有形(塞)善 過不及あるもの  
惡

三輪執齋

學統 先覺者中江藤樹熊澤蕃山の書によりて陽明學の研究に志した教育家として功頗る多い。

著書 日用心法、四言教講義、神道臆說、大學俗解、拔本源論抄、傳習錄講義

學說 (イ) 日用心法 立志、知辱、孝悌、養氣、度量、考氣象、内省、致良知、言行念慮を正しうす。執中 (ロ) 四言教 心の本體を以て明鏡止水の如く寂然不動の者とした。格物の物は事である。一身より天下に至る迄我が心意に寫

象し來るものは事なりとした。

中根東里

學統 初め佛門に入りしが還俗して徂徠鳩巢に歷學し後王門に入る。

著書 東里遺稿、東里外集

學說 (イ) 哲學說 宇宙を體軀となし人を心とし一大人格を實現すべしと論せり。

(ロ) 學問說 學問の本領は仁を體察するにある其方法は良體の本體を提撕するにある。

吉田松陰

學統 佐久間象山の門に入りて陽明學を修め兵學は家學山鹿流を學ぶ。門下幾多の俊秀を出して維新の鴻業を翼賛した。

著書 未焚稿、未忍焚稿、幽囚錄、武教全書講錄、野山文稿、幽室文稿、坐獄日誌、留魂錄等

學說

(イ) 道德論 松陰の學實心實行を以て本領となす。凡そ實行には目的觀念を要す。其比較的最終にして一貫せるものを志と言ふ。立志は松陰の最も重する處であつて志を立つる亦固より至誠でなければならぬ。道とは仁義禮智信を言ひ之を行ひて心に得たるを徳といふ。(ロ) 國體論

國體の特性

基礎的 萬世一系の皇統を戴くこと  
附屬的 忠孝一本論 君臣一躰忠孝一致唯我國爲然  
神器正統一致論

(ハ) 忠孝論 沒我的に絶對的に君國のために盡すべきものとし祭祀を重じた

(ニ) 士道論 眞文眞武を學び修身より平天下を致すを武士の本領とした。

古學派

山鹿素行

學統

素行神道佛老より和歌物語に至るまで凡そ學問といふ程のものにて研修せざ

るはない。而して朱子學を羅山に學びしも後終に宋儒の學を疑ひて古學を主張し仁齋徂徠等の先驅をした。

著書

聖教要録、配所殘筆、山鹿語類、武教小學、武教全書、中朝事實、原源發機、武家事記

學說

(イ) 宇宙論 宇宙は無始無窮である。陰陽の屈伸消長により生々發展してやまず。(ロ) 道德論 修身齊家より治國平天下に至る迄日用の道德を以て教學の本領とす。而して其の之に達するには古訓を學び聖人に則り之を日常に施すにある。然らば即ち禮備はり實に達することが出来る。(ハ) 心性論

性(天命)

内に發動す  
外に迹を止む

意

心 一身の主宰

其用

志氣

中を得る 聖

情

思慮

中に反す 凡

(ニ) 義利辨

君子は義をもて利となし小人は利をもて利とす。

(ホ) 國體論

國體 國體の尊嚴 萬世一系の皇統を戴くこと  
 上下の分明かなること  
 我國の文明 天皇聰睿知にましまし人民勇武なり兵器文物制度  
 水土萬國に冠たり

(一) 武士道論

武士道の本領…忠孝…(修爲)

意志鍛鍊 立本  
 明心術 練德全方  
 儀容の修爲 詳威儀  
 慎日用 自省

伊藤仁齋

學統 仁齋初め朱子學を學びて之を尊信したが三十七八歳の頃に至りてその孔孟の古義に悖るを悟り大いに古學を主張した。その門に來り遊ぶもの三千人堀川學派の勢力天下に重きをなした。

著書 論語古義、孟子古義、大學定本、中庸發揮、語孟字義、童子問、古義先生文集、仁齋日札等

學說

(イ) 宇宙論 宇宙の本質は一元氣にして理は形式的抽象的のもの即ち氣の條理に過ぎずとした。この氣や萬古無窮にして生々發展して息まざる底の者である。(ロ) 道德論 道は徳の發動する作用にして仁義の社交上に行はるゝものである。徳は内容の資質にして本來人に備はるものである。(ハ) 仁義即道論 仁義は總べての道の總腦である。而して仁は義を兼ねるが故に仁は道なりとも言ふことが出来る。道とは日常人の往來流行する所即ち人倫である。(ニ) 性と徳との關係 性は各人の固有生得する個人的主觀的のものにして徳は天下達せざるなき社會的客觀的のものである。而して性は可能態としての性であつて徳は實現態としての性である。



伊藤東涯

學統 父仁齋の學說を紹述し大いに堀川學派の維持發展を圖つた。

著書 辨疑錄、古學指要、學問關鍵、天命或問、復性辨、古今學變、經史論苑、經史博論、讀易私說等

學說

(イ)心身の關係 血肉ありて後心あり此の身變滅す。(ロ)天運論 宋儒は運を分ちて理の命氣の命となし後者を更に分ちて第一吉凶禍福貧富とし第二智愚賢不肖とした。東涯は氣の命中第一のものに就きて言ふのみ。(ハ)人道の本領 行儀を修め生産を治め身軀を保つ。(ニ)復性辨 佛老並に宋儒の復性説を完膚なき迄に批評した。

(1)考證的見地よりの批評 (イ)聖人人を教ふるに積累して其の大をなす。故に存養擴充の説ありて復性説なし。(ロ)孔子曰「吾十有五而志學云々」と。(ハ)技術、藝業の妙奥は工夫の積累になる。

(2)物理的見地よりの批評 (イ)天下有生のもの皆必ず其本ありて小を積みて大に至る。明鏡止水の無機物にあらざるよりは初めに備はるのことはない。(ロ)人固より聖賢たるべき素質は良知良能として生得し居れども其が現實となるためには經驗の蓄積を要す。

中江岷山

學統 仁齋の門に入りて四十餘年着實に研究し大いに古學派の爲めに盡した。

著書 理氣辨論、四書辨論

學說

(イ)一元氣論 理は氣中の條理道は氣の流行宇宙間一元氣のみ。(ロ)性心と道德 性心は個人的、主觀的、道德は客觀的社會的である。四端は性、四徳は道德である。(ハ)天理人欲を峻別して人欲を排せんとする宋儒の説に反對し人情(即ち人欲)を重んじ其の仁義によりて律せらるべきを言つた。



並河天民

學統 仁齋の門に入りて學びしかど疑あり自ら工夫して師説を駁した。

著書 天民遺言

學說 (イ)仁齋は經濟を賤視したが天民は之を重んじた。(ロ)仁齋は性情意を區別したけれども天民は之を區別しなかつた。

同一物 生より……性 人爲を籍らず  
實より……情 情實無偽なり  
體中の名……心 思ふを以て職となす

(ハ)仁齋は仁義禮智と性とを別物となし天民は之を同一視す。即ち仁齋は四徳と性とを内外の別となし宋儒は心内に別を立て天民は心内に合一した。

物徂徠

學統 徂徠林春齋及び鷲峯に學びしことありと言はれるけれども審かでない。多くは獨學して奥を窮め、終りに古文辭の一派を開くに至つた。

著書 辨名、辨道、論語徵、大學解、中學解、學則、徂徠集、護園隨筆、聖學問答書等

學說 (イ)道の觀念 道を以て禮樂刑政となし又政治法度の總稱とした。

道—先王の道(法天 鑑人情) (利用厚生) 禮樂(法則) 詩書(學文)

(ロ)徳論 道は先王に屬し徳は我に屬す。

道 先王—外存—社會的—形式的 教中—禮 教和—樂  
徳 自己—内得—個人的—活動的 安民—仁 知人—智 中和 政治的功利的

(ハ)氣質論 氣不變化の説をなして曰く氣質天の賦する所、豈變すべけんやと。(ニ)標準論 一、正邪 先王の道に循ふ者は正、反するものは邪 二、

先王の道にあらずとも凡そ人を利し民を救ふべきものは善 三、功利主義 道德も學問も教育も功利を目的とす。

太宰春臺

學統 春臺初め陽明學を學び後程朱の學を修めたが徂徠を見るに及びて其の門人となりて古學を究めた。實に徂徠派中道德の士を以て自ら任ずる人である。

著書 聖學問答、辨道書、春臺文集、紫芝園漫筆、六經略說、經濟錄

學說 (イ)道德論 内心は如何にもあれ外面に禮儀を守りて犯さぬを君子となす。又天性によりてなすことを誠なりとした。(ロ)修爲論 信斷勤を以て三綱目とした。

山縣周南

學統 徂徠派中其の性行の馴致と所論の公正とを以て出色の譽が高かつた。

著書 爲學初門、周南文集

學說 全國の統一と封建制度の嚴存と皇統一系なるを以て我國は萬國に冠たりとなした。

獨立學派

帆足萬里

學統 三浦梅園廣瀬淡窓と共に九州三偉人と稱せらる。其學一派に偏せず。自己の見によりて古人を解し全く獨立的態度をとつた。西洋學にも通じた。

著書 窮理通、東潜夫論、入學新論等

學說 儒佛調和論をなした。

二宮尊徳

學統 尊徳農家に生れて師に就くの邊なく多く獨學によりて其の所説を作る。彼れが説は思ふに其の豊富なる經驗より得來りしものであらう。

關係書 報徳記、報徳外記、二宮先生語録、報徳分度論等

學說 (イ)本領

教學の本領 報徳

事業 經濟 功利派  
心術 至誠 動機論 實行

(ロ)四綱領 至誠、勤勞、分度、推讓。(ハ)經濟論 教養相提携すべきを論じて分度を守り勤儉にして餘財を蓄積すれば盛富を來す盛富にして而る後仁義起る。(ニ)道德論 人道は半ば天道に従ひ半ばこれに反して初めて中庸を得るものである。而して所謂人道と言ふも四綱領に外ならない。凡そ善惡の標準は各人に普通にして永久に不易なる關係の中に求めなければならぬ。衣食の道は普通にして且不易である。故に衣食に利するものは善、之に反するものは惡とした。

### 神道派

#### 加茂直淵

學統

初め太宰春臺の門人渡邊某より儒教を修めしも荷田春滿の門に入りしより國語神道を究めた。其の門に本居宣長を出す。

著書

文意考、冠辭考、萬葉考、歌意考、國意考、祝詞考、語意考等を出す

學說

(イ)上代の道 天皇は神祇を崇敬し恩威並び行ひ明かに正邪を斷じ給ひ人民は祖先を崇拜し忠君を勵んだ。(ロ)儒佛論 儒佛共に神國を亂るものとして之を排斥した。

#### 本居宣長

學統

夙に朱子學を修めたが僧契仲の書によりて佛典の研究に志し後加茂真淵の門に入りて大に古言古文を研究した。

著書

古事記傳、葛花、宇比山踏、玉くしげ、古今集遠鏡、問答錄、玉鋒百首、玉の小櫛等

學說

(イ)宇宙論 空々漠々たる太虛の中に天御中主、高皇產靈、神皇產靈神のみ

先づ出現して天地生成し萬物生じた。(ロ)道徳論 人類社會に行はるゝ正邪善惡の現象は善神と惡神との所爲であつて遂には善神の勝利に歸すべきものとした。(ハ)異端論 儒教、道教、佛教、俗神道を排斥した。

平田篤胤

學統 篤胤幼にして儒を學んだが宣長の古書を読みて感奮し國學神道の研究を以て自ら任ずるに至つた。

著書 古史成文、古史徵、古史傳、古道大意、出笑定語話、俗神道大意等

學說 (イ)世界觀 創世記は本居宣長と略同じ。

空漠たる太虛 高皇產靈神 天御中主神 神皇產靈神 天地萬物

(ロ)人性論 人性は天神の賦與し給へるものなるを以て本來善である。故に人若し之によりて云爲し私智を加へざれば皇神の道に叶ふ。(ハ)道徳論 清

淨を本とし忠孝を以て君父に仕へ妻子を愛し親族和睦し朋友相信じ奴婢を憐み以て家の榮えんことを計らなければならぬ。

心學派

石田梅巖

學統 梅巖初め神道を學び後儒教及び禪宗を修め遂に忽焉として道の自然にあるを悟り心道の開祖となつた。

著書 都鄙問答、齊家論、要訓、商家童問答等

學說 (イ)人性説 宇宙の本體は理である。天道即人道である。故に曰く學問徳行の要は知心にあり。(ロ)心理説 人心は理である。四徳内に備はる。故に性は善である。然るに身體に附着する七情ありて本心を蔽ふ故にこの七情を去るは人の本分である。(ハ)學問論 學問の要は良知を致すにある。良知を致

せば本心を會得すべく以て知足安分の域に達し心廣く體胖となることが出来る。(二)實踐說 萬物の利を圖り且つ萬事禮儀によるべしとした。

手島全門

學統 心學を梅巖に學び師の歿後代りて講説した。

著書 子弟訓、商人夜話草、塵とり、

學說 (イ)人性論 人の性は善であるけれども教育によりて適當に指導しなければ

徳性實現せず。(ロ)道德論 忠孝一本説と一夫一婦説とを唱ふ。(ハ)修爲論

究理、慎獨、敬行を三綱領とす。

國民道德系統表

一 家族倫理

(イ) 孝

一、支那道德上に於ける孝の位置……最高概念なりしこと。

夫孝徳之本也。教之所由生也(孝經)五刑之屬三千。罪無大於不孝(孝經)君子務本。本立而道生。孝弟也者爲仁之本與(論語)

二、孝の本質 孝は子の感情を中心として父母の爲を思ひ努力する所の道德なり。故に孝は感情的事實なること。

三、孝の内容 (イ)身軀髮膚受之父母不致毀傷(孝之始也(孝經)父母唯其疾之憂(論語) (ロ)尊敬の情を有すること。今之孝者是謂能養。至於犬馬皆能有養。不敬何以別乎(論語) 生事之以禮。死葬之以禮。祭之以禮(論語)

語) (ハ) 父母の養を致すこと。(ニ) 父母に承順すること。子貢問、孝子曰、色難(論語)。(ホ) 父母の名を顯はすこと。立身行道。揚名於後世、以顯父母。孝之終也(孝經)。(ヘ) 父母の道を守り其志を繼ぐこと。父在觀其志。父沒觀其行。三年無改於父之道。可謂孝矣(論語)。(ト) 一般に自己の名譽を揚ぐること。

四、西洋諸國の倫理との比較 西洋諸國とても孝を惡徳なりとするにはあらねど東洋の如くこれを以て家族倫理の第一義となすにあらで夫婦間の愛情を以てより尊きものとす。

(ロ) 父嚴母慈

- 一、意味 父は嚴格にして母は慈愛に富むを謂ふ。東洋古來の倫理である。
- 二、由來 古昔氏が社會的單位たりし頃は男子は之が長となりて統御し多數の人に長たりしたため自ら嚴ならざるを得ない。故に今日の君主と父との中間に當

る態度をとりしかば自ら父嚴の習慣を馴致した。

(ハ) 弟

- 一、兄友弟悌 兄友に弟悌なるは東洋に於ける普通の道徳にして兄弟内にせめげども外其の侮を禦ぐとは東洋の人情なり。
- 二、友悌の説明 本來兄弟は同一の父母に生れ同一の家に長じたるものなれば同類意識最も強く随つて同情愛情も強かるべきである。

(ニ) 夫婦の關係

- 一、從來の風習 日本支那共に一夫多妻にて蓄妾の風あり。女は常に卑しきもの内にありて家政を司るもの從順なるべきものとせられ、男は尊きもの外に出で公儀に盡すものとせられた。されば貞操と云へば男子には關係なく女子のみの徳とせられた。夫婦の別は支那に於て殊に嚴重であつた。婦人に三從五去ありとし閨門を出でざるを可とするが如きは太甚し。蓄妾の公然

許されたるは男子の權力濫用は勿論なりと雖も氏族制度の時より家系を重んじたるため子供なくしては祖先の祭を斷つに到るを恐れたのである。

二、今日の倫理 一夫一婦にして最も人情の自然に叶ひたるものである。而して夫は妻を愛し妻は夫を敬すべきものとせらる。其のこゝに至りし理由次の如し。

(イ) 西洋思想並風習の影響

(ロ) 同情心の發達……婦人に對する同情心發達す

(ハ) 人格觀念の發達

(ニ) 婦人職業の發達……經濟の維持者に權力あり

(ホ) 女子教育の發達

三、今後の倫理 男女體質を異にし従つて本務を異にす。故に權利の異なるものあるは當然なり。生物學上男女の分化し來りし意味はより善き生物を作らんが

(ホ) 家系を重んずること

ために分業をなし各其の特質を進歩せしめんためである。

一、由來 氏族制度の結果にして日本に於いて特に重んぜられた。家名を斷つは不幸なるのみならず親に對して不孝とせられる。

二、價值 家系を重んずるは祖先を崇拜する所以にして又子孫に對する徳義である

(ヘ) 祖先を敬すること

一、由來 氏族制度の結果

二、價值 祖先を祭るは祖先の恩義を紀念することにして此一念が人民をして篤實ならしむるのである。又祖先を祭るは日本人をして郷土を忘れず大八洲のために努力する底の習慣を養ふに足る。

二 國家倫理

(イ) 忠

一、廣義 忠の字は中なかに从ならび心に从ぶ。己の心の眞底しんていを盡つくすを云ふ。忠信、忠恕、忠實。

二、狹義 廣義の忠を以て君に對する時は狹義の忠となる。忠君、忠義。

三、支那道德上に於ける忠の位置 支那古代にありては全民族ぜんみんぞくに畏敬さるゝに足る處の家柄いへがらなく諸侯並び起りしかば社會自然の趨勢として夫婦父子等の關係につきての家族倫理發達せり。殊に歷朝の興敗ありて君臣の關係不變ふへんてきえん的永恒かうてきなる能はざるを以て忠の道德上に於ける位置は高からず。

四、日本道德上に於ける忠の位置 萬世一系の皇室を戴ゆゑくが故に忠の道德的概念は標準へうじゆんてきがいねん的概念として維持せられた。

五、忠の概念の内容 (イ)廣狹 忠の中に孝あり孝の中に忠あり……忠臣は孝子の門もんに出いづ。

(ロ)嚴密なる意味 忠君—君其他一切の倫理

孝親—父其他一切の倫理

六、忠の起源 古代、部族的生活をなせし時、部族の長は諸方を攻掠し牧畜を略奪し範圍を擴張し其の功臣を褒するに土地又は家畜を以てした。此くして君臣の關係の必要を感じるにより忠義一般に獎勵せらるゝに至つた。定住的生活をなすに及びてもこの關係は重おもせらる。

(ロ) 日本主義

一、意味 日本にほんに生れ日本うまのためを圖るは日本主義にほんしゆぎにしてこは一の天祖教である。「修理固成是多陀用弊流之國」

二、神道 ステッド氏曰く「神道は愛國心の宗教的顯現なり」と實に他國たこくに類例るゑいを見ざる程強き愛國心は即ち日本主義にして即ち天祖教なること。

(ハ) 義務と權利

權利を主張することは即ち自己の法律上の人格を發展する所以にして他面



に於て夫れだけ自己の活動を大ならしむべき義務を全うするものである。而してこれ國家の意志に遵ふものにして教育勅語に「常ニ國憲ヲ重ンシ」とあるもこれである。

三 社會 倫理

(イ) 愛

一、孔子派の愛 「弟子入則孝出則弟、謹而信、汎愛衆而親仁云々」(論語)「樊遲問仁子曰愛人」(論語)「節用而愛人、使民以時」(同)

二、墨子派の愛 兼愛又は周愛と云ふ。曰く凡そ社會に戦争あり、衝突あるは吾人の憎惡に基く故にこの觀念を減じ更に進みて他人を愛すること猶自己を愛するが如くせば天下治りて平和は永く吾等人類の上に来るべし、如斯平等愛は他面自敬他敬の原理たる恭によりて牽制せられ調和せられ以て社會的生活を圓滿ならしむ。

(ロ) 以直報怨

「或曰以徳報怨何如」子曰何以報徳。以直報怨。以徳報徳。

(ハ) 恕

一、字義 如に从ひ心に从ぶ、他人の心も亦我が心の如くなるべしと想像して實行するが本義なり。故に己の欲せざるところ之を人に施すことなかれ。

消極的 之れを己に施して願はざれば亦に人に施すこと勿れ(中庸)  
積極的 己の欲する所を人に施すも亦恕なり(徂徠)

二、同情との關係

同情 淺 他人の苦痛を見て他人の苦痛を感ず  
深 其の人の心を忖度す(恕)

三、恕の孔子に於いて重大なりしこと

1、ある人の「一言にして終身之を行ふものあるか」と問へるに對し「夫

「れ恕か」と孔子の答へられしこと(論語)

2、中庸 忠恕道を違ふこと遠からず。

3、孔子曰く「我道一以貫之」曾子曰く「夫子之道忠恕而已」と(論語)

四、結論 恕は最も社會的なる徳なり。人に對して其の人のためを圖り又は其の人に同情するは社會的關係を強固にする所以なり。社會の平和結合はこれによりて維持せらる。

(ニ) 友誼

「己れに如かざるものは友とする勿れ」「晏平仲よく人と交る、久うして之を敬す」「朋友に數すれば疎せらる」「(論語)

(ホ) 慈悲

一、佛教思想 佛陀はこの思想を以て一切衆生に對したり。されば佛教にては動物に對しても此の思想この感情を發揮し不殺生を五戒の一に數へた。

二、儒教思想 羊豚牛を殺して天を祭りしも尙生物の死を厭へり。「君子の庖厨に遠ざかるは哀れなる聲を聞くに忍びざればなり」夫の孔子が宿を射ざりしが如きは生物に對する同情心の發現なり。

三、結論 動物に對する同情心の増大は人間精神の發達を意味し文明の進歩を意味す。

(ハ) 恩誼と節義

一、恩誼 恩誼ある人に對しては常に尊敬の念を有し之を忘れざること大切なり：義理。

二、節義 約束を守り然諾を重んじ盡すべく爲すべきは爲すべからざる又は行ふべからざることとはなざる底の道德にして此に由りて人格は成立す。

(ト) 公德

一、發達の原因 社會交通事業の發達と共に人は其の恩澤を感じ隨ひて社會的とな

り公徳起る。

二、本質 人情。

(チ) 人道

一、意義 何れの人に對しても苟も人間たる以上は之れに對して同情を有し尊敬を拂はざるべからずとする主義。

二、由來 歐洲人が自身の残酷性に對する反動として主張するに至りしもの。

(リ) 正直

一、孔子派の思想 葉公孔子に語つて曰く「吾黨に直き者あり、父羊を攘み子之を證す」と孔子答へて曰く「吾黨之直者。異於是。父爲子隱子爲父隱。直在其中矣」

二、日本に於いて最も重せらる

(ヌ) 中庸

一、通俗の意味極端ならざること、程よきこと、アリストテレースの中に同じ。

二、支那の古人の意味

1、孔子 「中庸の徳たる夫れ至れるかな民鮮きこと久し」

2、程子 「偏ならざる之中といひ易らざるこれを庸と云ふ、中は天下の

正道庸は天下の定理」

三、中庸の二方面

中庸 天下公正の道——一切倫理

程よきこと——各人固有の徳

四 自己に關する倫理

(イ) 恭敬

一、恭 人に對する態度の亂れず其の人を如何にも尊敬するが如く見ゆること。

二、敬 心を專一にして以て人を敬する事。敬は「ツ、シム」とも訓じ或る事を爲し

つゝある又は爲んとしつゝある時に精神を其の事のみ専にするを云ふ。

(ロ) 謙讓

一、本義 謙も讓も「ゆるる」にて「へりくだる」こと。

二、孔子 頗る謙を重要視せり。

(ハ) 誠

一、誠の本質 「誠者物之終始。不誠無物。是故君子誠之爲貴。」誠之者擇善而固執之者也。誠は倫理の本體にして善惡を辨別して善を選びて之を實行することによりて得らるるものなり。故に誠は倫理の根源にして又理想の極致なり。

二、實行主義の徳 誠者天之道也。誠之者人之道也。誠者不勉而中。不思而得。從容中道聖人也。これ天道は人道の模型、人道は天道の部分的模寫なりてふ思想にして「天命之謂性。率性之謂道。修道之謂教」と云ふ句と相對す。

三、誠の政治道徳的解説 在下位。不獲乎上。民不可得而治矣。獲乎上。有道。不信乎朋友。不獲乎上矣。信乎朋友。有道。不順乎親。不信乎朋友矣。順乎親。直有。反諸身。不誠。不順乎親矣。誠身有道。不明乎善。不誠乎身矣。

(ニ) 制怒制情

效果 忍耐力強しとは即ち制怒制情にして主觀的に腹の中にて忍耐することより起り來るものを云ふ。直情徑行は社會組織の維持を困難ならしむることあり。喜怒哀樂色に表はさざるは英雄の態度なり。

(ホ) 仁

一、字義 仁は人に从び二に从ぶ二人相偶するの意なり。六書正偽に由れば元は二に从び人に从ぶ。仁は人に从び、二に从ぶ。之れ天にありては元となし人にありては仁となす。元は一元の氣、仁は衆徳の總にして人の萬物に靈た

る所以は仁なりと。

二、仁の概念の分析

- 1、孔子の心理状態の統一なること 參乎吾道一以貫之。
- 2、仁者の情調 知者樂水。仁者樂山。知者動。仁者靜。知者樂。仁者壽。
- 3、仁は意的要素を含むこと 知及之。仁不能守之。雖得之必失之。
- 4、愛を包含す 樊遲仁を問へるに孔子答へて「人を愛す」と云へり。
- 5、仁は孝弟の徳を包含す 君子務本。本立道生。孝弟也者其爲仁之本與。
- 6、仁は恭敬忠を包含す 居處恭。執事敬。與人忠。雖之夷狄不可棄也。
- 7、仁は剛毅朴訥に近きこと 剛毅朴訥近仁。
- 8、仁は勇を含む 仁者必有勇。勇者不必有仁。

9、仁は恭寛信敏惠を包含す 能行五者於天下爲仁。請問之曰。恭寛信敏惠。

- 10、仁者は好惡の力を有すること 惟仁者能好人惡人。
- 11、仁は知の力あること 君子可逝也。不可陷也。可欺也。不可罔也。
- 12、仁は莊重の徳を包含す 君子不重則不威。又曰く臨之以莊則敬。
- 13、仁は敬の態度を有すること 出門如見大賓。使民如承大祭。
- 14、仁は忠恕を包含す 己所不欲。勿施於人。
- 15、仁は愛他の徳を包含す 夫仁者己欲立而立人。己欲達而達人。
- 16、仁は實行を重んず 爲之難。言之易。得無諷乎。
- 17、仁は政治の能力を包含すること 桓公九合諸侯。不以兵車管仲之力也。如其仁乎。如其仁乎。
- 18、仁は所續的なること 回乎其心三月不違仁。其餘則日月至焉而已。

矣。

(ハ) 勇

一、意義 アリストテレスは軍事的勇に限りたれども東洋にては倫理を實行する方面にも用ひられたり「義を見てせざるは勇なきなり」

(ト) 無我

一、佛教思想 沒我的に人のためを圖る。

二、儒教思想 毋意毋必毋固毋我。我を張りて私意を以て天下の正理を曲ぐるは不可なり。

三、自利と他利との關係 人皆自利の精神あり。されど一面聯想なる作用ありて同情心を惹起し他の制止の條件なくんば利他心は必然的に起り來る。人はこの兩者を圓滿に發達せしむるを要す。

思想講話—終り—

大正十四年十月一日印刷  
大正十四年十月五日發行

思想講話奥附

(定價金三圓八十錢)

著者 遠藤隆吉

發行者 東京市麴町區飯田町四丁目二十番地 海老原丑之助

印刷者 東京市神田區美土代町二丁目一番地 横山喜助

印刷所 東京市下谷區池之端七軒町卅七番地 教文社印刷所



發行所

東京市麴町區  
飯田町四丁目廿番地

教文社

電話 四谷四二二一  
振替東京三三七二四番



終

